

清末における湖北省の軍事留学生

—成城学校・陸軍士官学校を手がかりとして—

王 鼎

はじめに

清朝はそれまでの王朝と同様、華夷思想にもとづく秩序観をもち、諸外国との交流は朝貢貿易を中心としていた。したがって、近代における度重なる「内憂外患」の危機に直面し対応を迫られるまで、清朝政府は諸外国・地域への働きかけを行うことなく、「外交」は常に受け身であった¹⁾。明治維新以前の幾世紀にも渡る日本との関係も同様で、留学生は主に日本から一方的に派遣されてきた。日本は古くは隋・唐朝の時代から先進的な文化・思想を学ぶ目的で、「遣隋使」・「遣唐使」を派遣した²⁾。周知のとおり、海を渡った日本の「留学生」は、隋唐時代の律令・文化・仏教などの様々な分野の知識を学び、関係の密度に変化はありながらも、日本は常に中国から「教わる」形での歴史を積み重ねてきた。こうした関係に変化が現れはじめたのが、19世紀後半である。

アヘン戦争後、清朝政府は外国から汽船の製造・鉄道の敷設・鉱山の発掘などの実務・技術という「物」を導入し、いわゆる「洋務運動」を展開する。それに対して、日本も戊辰戦争（1868年）を経て明治政府が成立し、富国強兵・殖産興業などといった諸改革を断行していった。ほぼ同時期に近代化を開始した両国であったが、日清戦争を境に両国の違いが鮮明となった。清朝は日本に敗北し、政治・教育制度の改革はもちろん、軍隊を再編成して近代的な「新建陸軍」（以下「新軍」と略す）の人材育成が当面の急務となったと考えた。

当時、中央政府より地方総督（複数省を統括する長官）の考え方のほうがより柔軟性があり、行動も非常に活発であった。特に湖広（湖北・湖南）を長年治めていた張之洞（1836～1909）は軍事人材の養成に励んでおり、湖北に武備学堂を設立すると同時に、日本から軍事顧問・教官を招聘し、また留日学生も積極的に送り出した。

一方、大陸進出・朝鮮半島の植民地化政策を推進していた日本側は、1898年に陸軍参謀本部からの要請により、成城学校に「清国留学部」を創設し、軍事留学生の受け入れを始めた。同年6月に、浙江武備学堂が、徐方謙、段蘭芳、蕭星垣、譚興沛の4名の湖南・湖北籍学生を官費留学生として派遣するなど³⁾、各地方は陸軍士官学校に官費留学生を積極的に送り出した。ただ、その当時はまだ留学に関する確立した政策・規則がない状態であった。彼らは、陸軍士官予備校にあたる成城学校⁴⁾に入って1年半ほど軍事知識の補習を受け、学業修了後、陸軍士官学校に入学した。成城学校は、1902年に起こった「呉孫入学事件」により、

当学校の「清国留学生部」の受け入れを中止した。その翌年7月に、参謀本部は振武学校を設立し、留学生をすべて成城学校から振武学校に転校させた。陸軍士官学校に進学した留学生は、辛亥革命まで合計9期生にわたり、660名がいた。この中から著名な人物を輩出した。彼らは中国近代の軍事教育、外交史・政治史に多大な貢献をした。

本稿では、湖北省から派遣された留日学生を主な対象として、まず派遣の背景を考察し、そして、成城学校・陸軍士官学校に学んだ湖北留日学生の人数や学習状況を検証するとともに、湖北軍事留学生在在日中に経験した革命運動および帰国後、母国や地域の近代化にどのような役割を果たしたのかを解明したい。

I 先行研究

留日学生に関する研究は、数多くの成果蓄積がある。とりわけ中国人日本留学の歴史研究について、先鞭をつけた実藤恵秀（1896～1985）は、戦時下に著された『中国人日本留学史稿』（日華学会、1939年）、戦後の『中国人日本留学史』（くろしお出版、1960年）⁵⁾、修正・補充して改訂版となる『増補・中国人日本留学史』（くろしお出版、1970年）を出版したほか、『中国人留学生史談』（第一書房、1981年）などの業績が注目される。また、80年代に入り、阿部洋が中心となる研究グループが成立し、外務省外交史料館に所蔵されている留学生に関する統計史料と記録を活用しつつ、『アジアにおける教育交流—アジア人日本留学の歴史と現状』（国立教育研究所紀要第94集、1978年）、『日中教育文化交流と摩擦—戦前日本の在華文化事業』（第一書房、1983年）、『お雇い日本人教習の研究—アジアの教育近代化と日本人』（国立教育研究所紀要第115集、1988年）、『中国の近代教育と明治日本』（福村出版、1990年）、『戦前日本のアジアへの教育関与』（国立教育研究所紀要第121集、1992年）、『「対支文化事業」の研究—戦前期日中教育文化交流の展開と挫折』（汲古書院、2004年）などの代表的な共同研究の成果が出されている。さらに、21世紀になると、大里浩秋と孫安石を中心とする「中国人留学生史研究会」が結成され、これまで『中国人日本留学史研究の現段階』（御茶の水書房、2002年）、『留学生派遣から見た近代日中関係史』（御茶の水書房、2009年）、『近現代中国人日本留学生の諸相—「管理」と「交流」を中心に』（御茶の水書房、2015年）、『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』（東方書店、2019年）という4冊の研究書が出版された。これまでの研究で十分に解明されてこなかった手薄い部分も考察し、この分野の研究を一步前進させた。

日本留学生に関する歴史研究の内容は、教育史・歴史学・社会学・政治学・文学など多方面にわたっている。一方、対象時期から言えば、日清戦争から辛亥革命前後が最も充実しているが、問題点も少なくない。今一度まとめると、以下の3点である。

第1に、両国間の教育交流の歴史が未だに通史的な研究であり⁶⁾、近年の傾向として受入教育機関別および専門別の角度からの研究が進められているが、まだ十分とはいえない⁷⁾。

第2に、留学生の出身地域を取り上げ、その地域の派遣実態・特徴などをさらに分析する必要がある⁸⁾。第3に、留日学生たちの帰国後の諸活動を分析した論考はあまり見られない。従来の研究は留学生たちが日本で経験した学習や生活、そして在日中参加した革命運動などについて究明したものはあるが、帰国後、具体的に地域社会の発展にどのような功績を残したのかが検討されていない⁹⁾。

他方、分野別にみると、陸軍士官学校への留学生に関する研究は、他の分野と比べて量・質ともきわめて際立って多い¹⁰⁾。彼ら帰国後の動向は、近代日中政治・外交関係において非常に重要な役割を担っている¹¹⁾。軍事系留学生をめぐる先行研究は、徐志民『九・一八事変前対中国留日軍事学生政策研究』（中国社会科学院近代史研究所編、2001年）、宮城由美子「成城学校と中国人留学生についての一考察」（『仏教大学大学院紀要』第35号、2007年）、鈴木正弘「留日中国人学生の学んだ日本史教育の一端——振武学校・成城学校における日本史教育」（『立正史学』第103期、2008年）、楊典錕『日本陸軍士官学校的中国留学生——以第一至十一期畢業生為中心的分析』（『台大歴史学報』第94期、2012年）などがある。また、陸軍士官学校生の呉禄貞や藍天蔚などの個人を考察対象とした論考も存在している¹²⁾。

以上のように、軍事留日学生に関する研究はある程度存在しているものの、特定の地域を取り上げ、各地方からの留学生と比較してその具体的な留学状況・帰国後の動向についてより綿密に分析するものはまだ不十分である。本稿は、こうした研究蓄積を踏まえながら、特徴のある湖北省を研究対象とし、中国側および日本側の史料文献を利用しつつ、軍事系学生の留学中の活動や帰国後の動向について多方面から論述し、当時湖北省または中国社会にもたらした変革を垣間見ることにする。

II 湖北武備学生の派遣について

1. 清国における日本留学の開始

中国人の日本留学の歴史については、一般的に、1896年に、清朝政府の外交部門である「総理各国事務衙門」が、唐宝鏐ら13名を日本へ留学させたことをもって組織的留学生派遣の濫觴であるとされている。ただし、日本は、1871年に、清朝政府と「日清修好条規」・「中日通商章程」を締結し、正式な外交関係を結んだ。こうした背景のもとで、日本語教育機関として外交事務に携わる日本語ができる人材の不足を解消するため、清国駐日公使館内に「東文学堂」が設立された。それに清国から学生を募集し、公使館内に設立された「東文学堂」で学ばせていたのだが、これを留学生派遣の嚆矢とすることは難しい。学生の行動や生活の場所は公使館内に限られ、日本の社会や文化に直接触れることはできなかったため、通常の留学生として見做せないと考えられる¹³⁾。

日清戦争後、恭親王・李鴻章らが推進した「中学を体となし、西学を用となす（中体西用）」を軸とする洋務運動の不備が露呈し、「変法運動」と呼ばれる政治変革が起こった。その眼

目は、教育を一新することである。そのため、留学事業に何よりも力を注いだ。当時、湖広総督張之洞は、1898年3月に清朝での日本留学の大号令といわれる『勸学篇』¹⁴⁾を著した。その中で、学校成立による近代教育の普及や、外国書籍の翻訳を行うよう説いた。日本の有志の士が明治維新前後、外国留学によって新しい諸学問を摂取した結果が現在の隆盛をもたらしたと訴えている。さらに、李鴻章が提唱していた「留美幼童」¹⁵⁾の反省を踏まえつつ、留学対象として知識人・貴族を優先させた。また、張之洞は、当初の「遊学」という節の中で、日本への留学生派遣を勧めた。その利点について、「遊学の国に至っては、西洋は東洋(日本)に如かず。一、路近くして費用を省き、多く遣わすべし。二、中華を去ること近くして考察し易い。三、東文は中文に近くして、通曉しやすし。四、西洋学甚だ繁雑、凡そ西学の切要ならざるものは、日本人すでに斟酌して削除・簡潔に改めている。清国・日本の情勢風俗相近く、模倣しやすい。事半にして功倍すること、此に過ぎるものはないのである。もし学問を深く追求したいのであれば、また西洋に赴けば良いのではないか」¹⁶⁾と述べている。

要するに、張之洞は『勸学篇』において留学先として日本はもっとも良い選択肢であると推奨している。改めてその理由を要約してみると、「同文・路近・費省・時短」の8文字に尽きる。つまり、漢字を使う点で速く学ぶことができ、距離が近いので安い費用で学を修めることができるという理由である。この『勸学篇』は、同年6月に光緒皇帝の勅令を得て、各地方に配布され、百万部も売れたと言われる¹⁷⁾。これにより、日清戦争後、李鴻章(1823~1901)に取って代った張之洞は、地方で最大の実力者として当時の社会に対してどれだけの影響を与えたのかが分かる。一方、日本政府も張之洞の動向を把握しつつ、密接な外交工作を展開している。

2. 川上操六と張之洞の接近

1896年に、湖広総督張之洞は湖北の軍事人材を養成するため、湖北省城内に位置する東偏黄土坡(現・武昌区首義路一帯)で「武備学堂」を創設した。学堂総辦(事務を総轄する校長にあたる)は蔡錫勇(1847~1897)で、学堂提調(幹事長・書記官にあたる)は知府錢恂(1853~1927)である。1896年10月、「曉諭招考武備学生示」¹⁸⁾として募集要項が出され、一ヶ月後、応募者は4,000名以上に達していたが、選考の結果120名が合格した。また、1897年3月に中央政府に上奏した「設立武備学堂摺」¹⁹⁾によれば、学堂の修業年限は3年で、「講堂」と「操場」で行う科目を設置している。前者は軍械学・算学・測繪地図学・各国戦史・營壘橋道製造之法・營陣攻守転運之要という理論的科目で、後者は槍隊・炮隊・馬隊・營壘工程隊・行軍隊・行軍砲台・行軍鐵路・行軍電線・行軍早雷・演試測量・演習體操という実技であった。

当時はドイツの軍隊をモデルとしていたため、外国人教師は二人ともドイツ人であった。しかし、1897年11月にドイツが山東省膠州湾の租借権を要求したため、清独両国の政治・外交関係は厳しく冷え込んだ。またロシアはこの機に乗じて旅順・大連を占領し、フランスは雲南・広西に勢力を拡大しつつあった。このように、各国が清国の領土を分割していくなか

で、日本は親善外交の一環として、「救いの手」を地方総督に差し伸べた。同年12月、川上操六（1848～1899）は、陸軍参謀部員の神尾光臣²⁰（1855～1927）を武昌へ派遣して、張之洞に武備学生を日本留学させる提案をするように促した。外務省外交史料館に所蔵されている「清国兵制改革一件」によれば、上海総領事代理の小田切萬寿之助が外務次官の小村寿太郎に以下のように報告している。

神尾陸軍大佐先キニ長江筋巡回ノ際、湖広総督張之洞ヲ訪問セシモ、張之洞ハ堤工勘査ノ為メ武昌ニ在ラス、不得已鐵路大臣盛宣懷ニ面接シテ清国兵制改革ノ要ヲ説キタルノ結果、本年ニ入り大佐再ヒ渡航シ、盛宣懷ト協議ノ上改革案ヲ起草スルト約シテ、相分シタル右兵制改革ノ件ハ固ヨリ張之洞ノ意中ニ出テタル事ニシテ、先般同人ハ武昌ニ帰任後、電報ヲ以テ上海海関道蔡鈞ニ向ケ、神尾大佐ト面談協議致度ノ意ヲ通スヘキ旨申来候処、当時大佐ハ既ニ帰朝ノ途ニ上リ、又小官ハ蘇州出張中ニテ当地ニ在ラサリシテ以テ、蔡道ハ直接ニ帝国陸軍省気付ケ神尾大佐宛ヲ以テ書面差送り候得共、尚ホ小官ヨリモ電報ヲ以テ右伝報ヲ乞フ旨依頼有之候ニ付不取敢、本月二日電報ヲ以テ右及具申置候。尚ホ張之洞ヨリ蔡道台ヘノ来電ハ同人ノ本邦ニ対スル意向ヲ知り得ヘキモノニ付キ、特ニ謄写シテ、御送付ニ及候間、御査閲ノ上川上参謀次官ヘ御移牒相成度、此度及具申候²¹。

張之洞は、省外の堤防工事を視察中であり、武昌にいなかったため、神尾は、鉄道大臣の盛宣懷（1844～1916）と会い、軍事改革の必要性について話したうえ、来年また訪問すると約束した。また、神尾は江漢関道知府の錢恂（1853～1927）と接触し、欧米列強の脅威によって清国と日本は危機的状況にあり、同種同文同教の両国が連携する必要がある旨を伝えた。今回の神尾訪問を張之洞は非常に重視し、再度訪問するよう強く求めた²²。

1898年1月、川上操六は参謀本部第三部員の宇都宮太郎（1861～1922）を漢口へ派遣した。宇都宮は張之洞と会見し、日本人軍事顧問を雇用すること、武備留学生を日本に派遣すること等について話し合った。その翌月、参謀総長となった川上は、再び神尾光臣と宇都宮太郎を張之洞のもとへ赴かせ、今後ヨーロッパ列強各国に対抗していくには、何より日本の援助に頼って清国の軍事力を向上させる必要があると論じていた²³。

一連の説得の結果、張之洞は留学生派遣の下準備として、同年3月に姚錫光、張彪、徐鈞浦、吳殿英、黎元洪瞿世瑛の6名を日本の陸軍省、文部省、各種軍事学校、軍隊などに視察に赴かせることを決定した²⁴。姚錫光一行は2ヶ月間の視察終了後、帰国し直ちに「査見日本各学校大概情形手摺」という報告書を張之洞に提出した。その内容は、日本の軍事教育を評価し、日本と連携して清朝の軍事力を強化していく必要があることを指摘したものであった²⁵。張之洞はこれを了承したが、年内に派遣するという当初の計画は先延ばしになった。その原因の一つは学生の留学経費に関する問題だったと考えられる。1898年9月に宗方小太

郎の報告には次のような記述が見られる。

湖広総督張之洞はさきに日本参謀本部と密約し、文武学生百名を日本に派遣し学習せしむる計画にて、現に湖北より五十名、湖南より五十名を召募せんとし、武備学堂提調姚錫光を湖南に派し、同地の学生を選抜せしめ、姚錫光は已に六十名の候補者を得て帰来せり。然れども、現在張之洞は其経費の出処に苦しみ、未だに速かに派遣せしむる運に至らず²⁶⁾。

当時の駐日公使、矢野文雄は清国派遣留学生200名の費用は日本側が出資すると口頭で述べたものの、日本政府内部にはこの提案に反対する声もあり、結局日本側が提供できた資金は、予想していた金額より遥かに少なかった²⁷⁾。さらに、9月21日に戊戌政変が発生したため、派遣計画の実行は暗礁に乗り上げた。

その時、首相を辞任していた伊藤博文は、中国を訪問中であった。9月に北京で慶親王や康有為らと面談し、そして光緒帝に謁見した。その後、西太后がクーデターを引き起こし、変法運動に終止符をうった。伊藤は10月に漢口で張之洞と会い、そこで、戊戌変法のような急激な改革に反対するとともに、根本的な解決の道は軍備の近代化であり、日本人の軍事顧問を招聘した上で、一刻も早く軍事学生を日本へ派遣する以外にはないとの見解を示した²⁸⁾。後日、張之洞が小田切総領事を通じて伊藤博文に渡した感謝文には、「アジアの対局について論じ、啓発されること大である、また、この危機を乗り越えるために日本へ武備学生を派遣することを決定した」と記してあった²⁹⁾。

一方、日本国内においては、1898年11月に「東亜会」・「同文会」が合併して「東亜同文会」が設立された。その翌月に、当会の初代会長近衛篤磨（1863～1904）は「帝国の位置と現代の政治家」を発表した。

蓋し今日帝国の最も急とする所は速に国是を定め、国論を定むるに在り、而して中国に対するの政策を一定するは最も急にせざる可らず。余は今日に於いて、帝国と中国と同文同種の故を以て、帝国をして自ら進みて中国の運命を負担せしむべしと言ふにあらざ、唯帝国将来の運命を察し、之に適応すべき切実なる経綸を定め、之に順ひて機に應じ変に臨み、急施猛行、以て今日の宜を制すべしと曰ふ也³⁰⁾。

当時、清朝の直面していた危機について、国内での関心が高かったのは確かである。ただし、当局が論じている「日清提携」および「東亜保全論」は表面的なもので、その理由は日中両国が同文同種だからというより、実際には、日本の運命と前途を最優先に考えてのことであった。また、1899年5月に山縣有朋（1838～1922）が松方正義蔵相（1835～1924）と青木周蔵外相（1844～1914）に宛てた「清国特使の意見書」には次のようである。

清国の情勢を見るに歐洲列強至る所、清国の版図内に其利益線を張り、終に清国の地図は変して赤黄青の色分けとなるに至るへきは明なり、清国は彼の猶太人種の如く国滅して人種存するの情況を見るへしと断定せざるを得ず。我国も豫め此の未来に処して、出来得る丈の利益線を拡充するの措置に出ざる可らざる……清国との交際上親密を保ち、清国に対し我利益線を拡充するの機会あるときは、常に之を逸せざる様注意を怠る可らす然れども、清国と我国との交際をして、親密の程度を超え、欧州列強をして日清会盟以て、欧州に当るの嫌疑を抱かしむるか如きことあらは、終に人種の争となるのみならず、目下海牙府に於て開設の平和会議をして、我国の不利益となるの結果を生するやも図り難し……東洋に於いて、真に其独立を保つことを得るは、唯我帝国なるのみなれば、欧州並に清国に対する我外交政策は慎重に慎重を加え以て、国歩の蹉跎来すことなきを期せざる可らす³¹⁾。(句読点・傍点は筆者)

このように、日本政府にとって、当時の国際情勢の下でいかに中国での利益を拡大していくのかがもっとも大きな課題であったことがわかる。要するに、留学生の派遣は、清国に対する「親善外交」というより、清国に対して政治・経済・外交・文化などのあらゆる面において日本の隠然たる勢力を浸透させることであった。

3. 最初の湖北留日学生派遣

1899年、在上海総領事代理の小田切萬寿之助から外務次官の都筑馨六に「機密第二号・張総督派遣ノ学生出発ニ関スル件」という報告がなされた。その記録によると、湖北派遣の20名の武備学生は、武昌織布局翻訳官の鄺国華の引率で、同年1月7日に招商局汽船江裕号で漢口から出発した。そして、上海で南洋大臣により派遣された20名の学生と合流し、1月14日に合計40名の官費留学生在上海から「薩摩丸」で出発し神戸港に到着した。18日に到着後、翌日に汽車に乗り、20日の朝、東京の新橋に到着した³²⁾。表1は、外務省外交史料館所蔵の関係資料に基づいて、20名の留日学生の情報を整理したものである。

表1. 最初の20名湖北留日学生

	氏名	字	出身	派遣元	配属先	備考
	鄺国華					監督・引率
1	劉邦驥 ³³⁾	襄奎	湖北漢川	兩湖書院	近衛野戦砲兵聯隊	
2	呉元澤 ³⁴⁾	恵軒	湖北保康		近衛歩兵第三聯隊	
3	田呉炤		湖北		近衛野戦砲兵聯隊	
4	呉茂節		安徽		近衛歩兵第四聯隊	
5	盧静遠 ³⁵⁾	惺源	湖北竹溪		近衛野戦砲兵聯隊	
6	顧臧		広東		近衛工兵大隊	
7	呉祖蔭		湖北		近衛第三聯隊	
8	劉賡雲 ³⁶⁾	伯剛	湖北沔陽		近衛第三聯隊	
9	鉄良 ³⁷⁾	韻錚	湖北荊州		近衛第三聯隊	旗人駐防

	氏名	字	出身	派遣元	配属先	備考
10	高曾介		直隸	武備 学堂	近衛第二聯隊	
11	吳紹璘		湖南		近衛第一聯隊	
12	徐傳篤		江蘇		近衛第一聯隊	
13	鄧承拔		湖北		近衛工兵大隊	
14	易甲鵬		湖南		近衛第二聯隊	
15	杜鐘岷		貴州		近衛騎兵聯隊	
16	傅慈祥 ³⁸⁾	良弼	湖北潜江		近衛第二聯隊	
17	吳祿貞	綬卿	湖北雲夢		近衛騎兵聯隊	
18	萬廷猷		湖北		近衛野戰砲兵聯隊	
19	文華		湖北荊州		近衛野戰砲兵聯隊	旗人駐防
20	張厚琨		直隸南皮	学習院	張之洞長孫	

出典：外務省外交史料館「在本邦清国留学生関係雑纂・陸軍学生部 第1巻」³⁹⁾

湖北より派遣された留学生は、両湖書院⁴⁰⁾ から9名、武備学堂から10名、また「学習院」に入学した張厚琨（張之洞の長孫）であった。他方、南洋大臣より派遣された20名のうち、南洋武備学堂より派遣された学生14名は成城学校に入った。残りの章宗祥、雷奮、胡祜泰、楊蔭杭、楊廷棟、富士英という「南洋公学」⁴¹⁾ より派遣された学生6名は「日華学堂」に入った。すなわち、軍事を学ぶ33名は成城学校、法学・師範などを学ぶ6名は「日華学堂」に入学した。

同年10月、張之洞はさらに規模を拡大し、知府・錢恂を監督にして、学校視察・陸軍・農工商学・製革などを学ぶ学生81名を選抜し留学させた。46名が「神戸丸」に乗って先発し、一週間後さらに35名が「山城丸」に乗って赴日した。以下の表2は、81名の学生についての情報である。ただし、注意すべきは、以下の修学事項はあくまでも予定で、実際には変更が多かったという点である⁴²⁾。

表2. 1899年10月派遣した湖北留学生について

船情報	修学事項	姓名	人数
神戸丸 1899年 10月21発 合計46名	陸軍	謝東泉、高連升、方中和、劉錫祺	4名
	学校視察	陳毅、胡鈞	2名
	測量術	哈漢章 ⁴³⁾ 、沈尚濂 ⁴⁴⁾ 、舒清阿 ⁴⁵⁾ 、寶瑛 ⁴⁶⁾	4名
	農工商学	羅会祖、王榮樹、王璟芳、程家樺 ⁴⁷⁾ 、易迺謙、范鴻泰、湯時敏、石潢、權量、屈德澤、喻其相、張鴻藻	12名
	砲兵工廠 兵器学	王遇甲 ⁴⁸⁾ 、余明銓、蕭開桂、楊正坤、張長勝、藍天蔚、敖正邦 ⁴⁹⁾ 、段金龍、蕭先勝、蔣政源、應龍翔 ⁵⁰⁾ 、蔣肇鑑、龔光明 ⁵¹⁾ 、吳祐貞、張厚德、鄧慎言、何敬、鄧著、黃興發、程勉、朱鼎彝、陸宗輿、王鴻年、左蘭蓀	24名
山城丸 1899年 10月28発 合計35名	陸軍	黎元洪、劉溫玉、蔣声耀、楊蓉第、李襄鄰、華承禧、米文友、焦坤山、沈棟樑、卓占標、陳世貞、陳得龍、李澤淵、李明章、吳良斌、盧炳春、劉應祿、王有勝、張紹緒、吳瑋文、高明榮、魏吉元、蕭定甲、鄧春樵、楊樹華	25名
	製革業	許珊茂、吳凱康、劉德恕、嚴法祖、葉不彤、蕭承澤、楊友梅、王厚志、劉斌孫、李開燿	10名

出典：外務省外交史料館「在本邦清国留学生関係雑纂・陸軍学生部 第1巻」³⁹⁾

以上のように、日本の陸軍参謀本部が張之洞に対して行った説得工作は効果が上がっていたと言える。結果として、1899年には湖北からの留日学生の数は100人ほどに上り、当時の

留学生の中では最も大きな割合を占めていた。湖北より派遣された留学生の多くは、成城学校のある牛込区（現・東京都新宿区）で活動していた。南洋公学から日華学堂に派遣された章宗祥の自伝に以下のような記述がある。

日本にいるとき、皆よく集まって国政・革命思想について話した。組織の発展も甚だしく速かった。毎週日曜日、成城学校に学ぶ学生の「維新派」（一方、湖北から学生には、極めて古い見方を持っている方もいる。当時は「頑固派」と言われ、付き合わないようにはしていた）と会合を持った。後に日本茶室を会所となし、「勵志会」を組織し、上野三宜亭・牛込清風亭に集まってお茶・煎餅を用意して、自由に討論している。勵志会という組織は、会員はすべて平等に扱い、会長を選定せず、当会の幹事も会員が交代である。集会での演説、講義、時事評論など各自思い思いにし、形式上の制限は一切ないが、品行は重視された。ある学生が、学校で日本人教官に謝罪するとき、日本式の土下座で地に伏せて叩頭したことがあり、外国人に対しそれを行うことは恥辱であるとし、その学生の除名が提起された。実際は日本人が床に座って互にお辞儀しあうのは通例であり、中国の跪いて許しを請うこととは状況が違っていた。会員の演説者の中で、最も激烈なのは湖北出身の学生であり、たとえば、傅良弼、呉綬卿、藍秀豪（即ち傅慈祥、呉祿貞、藍天蔚のこと、筆者注）はひと際、目立っている⁵³⁾。

翌年、義和団事件が勃発し、8月には呉祿貞と傅慈祥の湖北留学生は帰国して漢口で「自立軍蜂起」⁵⁴⁾に参加した。しかし、首謀者である唐才常が張之洞に逮捕されたことによって失敗した。この蜂起の目標は、単に失権した光緒帝を復位させるのではなく、下からの武力行動を通じて、立憲君主制度を中国で実現しようというものであった⁵⁵⁾。このような留学生の行動は張之洞の警戒感を引き起こし、傅慈祥などを処刑したほか、沈翔雲の官費生資格も取り消した。これにより、積極的に留学計画を取り組んでいた張之洞も、1900年には新たに留学生派遣を実施することはなかった。

4. 成城学校の教育実態

成城学校は陸軍士官学校の予備校であり、中国人留学生を受け入れるため、1898年に学内に「清国留学生部」を創設した。参謀長の川上操六は当時の校長を兼任した。修学年限は、15ヶ月から18ヶ月までと、一定していないが、第一期は1899年2月から翌1900年7月までの1年半となっている。当時、清国政府派遣の視察官である沈翊清が書き残した『東遊日記』には成城学校のカリキュラムが見られる。課程は語学、普通学、軍事学の三種類であり、普通学は、日本語、日本文、地理地文、歴史、算術、幾何初歩、幾何、代数、平面三角法、博物初歩と生理衛生、化学、物理、図画の13科目である。軍事学は、体操、銃器訓練、剣術、部隊訓練などがある（表3を参照）⁵⁶⁾。なお、それぞれの科目内容については「清国学生一

年半教育学科配当授業回数表」および「清国学生教授学科科目程度表」⁵⁷⁾に詳しく記載されている。このことから、成城学校の教育内容について、軍事に関する「体操」課程はもちろん、日本語の課程は最も重視され、特に前半は日本語の時間配分が多く⁵⁸⁾、徹底的に語学教育を行っていることのほか、普通学の課程は算術、幾何、代数、図画などといった数学系の科目に占める割合が大きいことが分かる。

表3. 成城学校のカリキュラム

曜日	7時	8時	9時	10時	11時	11時半	1時～
月曜日	歴史	平面幾何	日本文	物理	教範	体操	
火曜日	平三角	生理	日本語	代数	教範	体操	
水曜日	教範	日本語	平面	幾何	物理	平三角	体操
木曜日	画学	代数	日本文	平面幾何	教範	体操	
金曜日	教範	歴史	平三角	生理	物理	日本語	体操
土曜日	代数	物理	日本文	歴史	体操		

出典：沈翊清『東遊日記』

授業のほか、学校での一日の生活は、「起床午前5時、朝食6時、診察（病気の者）6時半、自習7時から8時、昼食11時50分、入浴午後1時から7時、夕食4時半、散歩夕食後から6時半、自習6時半から7時半、就寝8時半、消灯午後9時、その間午前7時から午後2時まで授業があった。授業で特徴的なことは、1班から4班すべての班に毎日体操が組み込まれていたことである。言語習得のため、日本語の口語・文法授業も毎日行われていた」⁵⁹⁾と記録されている。そして、「清国陸軍留学生卒業成績表」によれば、1899年に入学した41名（湖北19名、南洋14名、北洋8名）のうち、総合成績において優等は16人、中等は23人、下等は2人となり、全体的に良い学習成果を取めていることが分かる⁶⁰⁾。

成城学校にある「清国留学生部」の設立当初は、人数が少なく、寄宿舎は牛込区市ヶ谷薬王寺前町32番地にあったが、人数の増加につれ、市ヶ谷河田町に収容力をもつ寄宿舎が新設された⁶¹⁾。1903年7月、当学校は私費留学生5人に対して入学不許可となったことに起因する衝突事件があったため、清国留学生の受け入れをいったん中止した。この学校の卒業生数は、1900年で39名、1901年で22名、1902年で7名、1903年で89名、合計157名に至った。ただし、1903年、同校の「清国留学生部」は陸軍志望学生に対しての予備教育を中止し、文科学生・私費留学生の受け入れを開始した。

Ⅲ 振武学校と陸軍士官学校について

1. 振武学校の誕生

振武学校は、陸軍士官学校や陸軍戸山学校へ進学を志望する中国人留学生に対して予備教育を行っていた成城学校より、諸般の関係事業を引き継いで設立された軍事教育機関であ

る。1903年設立当初は、成城学校と同じく、速成教育を施し修学年限は15ヶ月となっていたが、1905年に3ヶ月延長され18ヶ月となり、1907年から3年制に変更された⁶²⁾。当校は私費生の受け入れをせず、志願者は、必ず清朝大臣の審査を受けなければならなかった。駐日公使・楊枢は各省の督撫に以下のような通知書を出している⁶³⁾。

日本に遊学し武科に学ぶ学生たちは本大臣の審査を受ける必要がある。大吏の公文書がなければ学校に推薦することはできない。最近一部の生徒に公文を受け取って日本に到着後、別の保証人を探して文科に入る者がある。受け取った推薦状を無断で他人に贈り、学校名のところを隠して振武学校に入ったということを耳にした。まだ証拠を掴んでいないが、そのような事件には早急に歯止めをかけなければならない。今後各省が諮り学生を日本に派遣するとき、もし軍事学を学ぶ場合、各省の武備学堂の受験章程に倣って、当該学生には公文書を受け取る前に本人の写真を二枚提出させ、一枚は記録に残して査察に備え、一枚は公文書のうしろに貼ってから割り印を押す。そして封をして当該学生に渡し、推薦状の真偽を確かめる証拠とする。

陸軍参謀本部は振武学校を設立し、入学の条件を厳しくした背景は、1902年7月に起こった「呉孫事件」がきっかけと考えられる。これは、私費留学生として来日した呉敬恒と孫揆均が成城学校に入学を希望したが、駐日公使・蔡鈞により強制排除されたことをうけ、その後、留学生と駐日公使館間で衝突紛争も起こり、日本側は治安を乱した理由で二人を国外追放にしたため、留学生の間で抗議運動が広がったという事件のことである。日本政府と駐日公使との間で協議した結果、対応措置として参謀本部が直轄する振武学校を新たに設立することになった。すなわち軍事の官費留学生のみ受け入れることとし、私費生を受け入れなかった。また、同校の学則は非常に厳格であり、入学のとき、7条の誓約書に署名する必要があった⁶⁴⁾。

振武学校の設立後、清朝政府は各省の兵権を集中し軍事留学生を管理する目的で、1904年5月19日に「選派陸軍学生分班遊学章程（16条）」⁶⁵⁾を定めた。ここでは、清朝政府は毎年各省から18歳以上22歳以内の学生を100名選んで派遣することや、学費の支給や学生たち帰国後の登用任命などについて詳しく記されている。当該章程により、1898年から1903年前後まで、軍事学生の派遣は主に各地方総督が中心として行っていたが、これ以降は清朝政府が直轄する「総理練兵処」（以下、「練兵処」と略す）によって派遣生を選出することになった。

2. 湖北留日学生と陸軍士官学校

陸軍士官学校は、1874年に「陸軍士官学校条例」により陸軍将校養成のための教育機関として創設された。1900年から留学生の受け入れが始まった。当時の制度では日本人の士官学校生は、まず一等兵として聯隊や大隊で1年間の軍事生活を体験し「軍曹」となる。そして、

陸軍士官学校に入り、1年半の正式な専門教育をうけて合格した者は、「曹長」となる。学校を卒業後、もともと所属していた聯隊・大隊にもどり、「見習士官」として半年ぐらい新兵を教えるという実習を行う⁶⁶⁾。

それに対して、留学生たちは成城学校（後の振武学校）で15ヶ月から18ヶ月の予備課程を受ける。これはちょうど日本人の中学校修了程度にあたる。そして、彼らは歩兵・砲兵・騎兵・工兵といった項目を選択して、士官候補生として各聯隊または大隊に配属される。しかし、その期間は日本人よりはるかに短く、半年程度である。軍隊生活を体験してから、正式に陸軍士官学校に入り1年間の軍事教育を受ける。終了後、再び元の配属先に戻り「見習士官」として半年程度部隊での勤務を行う。すべての科目に合格すれば、ようやく士官資格が授けられる⁶⁷⁾。要するに、日本人と留学生の育成ルートはほとんど変わらないが、その育成年数に関して留学生の修業年限は日本人より約半分に短縮されていた。一種の速成教育であったといえよう。

前述したとおり、清国の武備留学生は、1898年6月に浙江省より派遣された徐方謙、段蘭芳、蕭星垣、譚興沛から始まったが、彼らは陸軍士官学校予備校である成城学校の第1期生として入学した。続いて、1899年1月に、湖北・南洋より派遣された33名の官費留学生が成城学校の第2期生として入学した。ここで注意したいのは、成城学校の第1期生と第2期生は入学時期がそれぞれ1898年7月と1899年2月で異なるが、1900年7月に同時に卒業したことである。さらに卒業後ともに第1期生として陸軍士官学校に入学している。その中には帰国後、清国または中華民国時代に大いに活躍して政府の中核を成す人材となった者も多く含まれている。1900年から辛亥革命が勃発する前の1910年まで陸軍士官学校で学んだ学生数のデータを表4にまとめた。また、湖北出身の留学生数も示しておく。

表4. 陸軍士官学校第1期から第9期までの清国留学生

	在学期間	入学人数	科目別学生数					卒業人数
			歩兵	騎兵	砲兵	工兵	輜重兵	
第1期	1900.10	41	22(8)	3(1)	9(4)	5(2)		39(15)
第2期	1901.10	25	16(13)	2(2)	4(3)	3(2)		25(20)
第3期	1903.10	92	35(1)	11(0)	27(0)	15(0)	4(0)	92(1)
第4期	1906.12	83	33(18)	11(2)	19(10)	9(3)	2(1)	74(34)
第5期	1907.10	58	23(12)	7(1)	11(6)	12(1)	4(1)	57(21)
第6期	1907.11	205	110(19)	23(2)	39(5)	17(2)	8(2)	197(30)
第7期	1908.12	55	26(0)	10(0)	12(0)	5(1)		53(1)
第8期	1909.12	55	28(1)	10(0)	11(1)	5(0)		54(2)
第9期	1910.11	37	29(1)	6(0)	1(0)	1(0)		37(1)
総計		660	322(73)	83(8)	133(29)	72(11)	18(4)	628(124)

出典：『日本陸軍士官学校中華民国留学生名簿』などを参考として筆者作成
括弧内は湖北出身の学生数⁶⁸⁾

先行研究の多くは、陸軍士官学校に学んだ清国留学生に関して、その入学時期、卒業時期および入学人数などの基本データが一致していない。その最も大きな原因は、上述したよう

な、陸軍士官学校の養成ルートにある。つまり、部隊と学校を行き来する教育課程になっていることが混乱を生み出している。それらの学生の入学起点を士官候補生としての入隊時期に求めるものもあれば、正式に軍事教育を受ける時点とするものもある。このように定義が画一化せぬまま情報が拡散し、基本的なデータにも差異が生じたと考えられる。中には、史実と明らかに異なる記述も多く存在している⁶⁹⁾。ここで、筆者は外務省外交史料館、成城中学校・高等学校に所蔵されている史料を利用して、陸軍士官学校に関する部分の誤記を訂正したうえで、湖北出身の士官学生についての正確な情報を再度確認した（附録・陸軍士官学校（第1期～第8期）の湖北留学生および活躍者たちを参照のこと）。

附録の表から陸軍士官学校が受け入れた清国留学生、第1期から第9期まで合計628名の卒業者のうち、湖北出身者は124名であり、約20%を占めていることがわかった。とくに、第1期は、39名卒業生のうち15名で約4割を占めており、第2期は、25名のうち20名で8割を占めていた。第3期は、ほとんどが北洋・南洋大臣により派遣された学生で、湖北出身は1名しかいなかった。第4期は、74名の卒業者のうち34名で半分近くが湖北出身者となり、第5期は57名のうち21名で約4割、第6期は197名のうち30名で15%を占めていたのに対して、第7期以降は、湖北留学生の姿はほぼ見当たらなかった。

前述したように、湖北早期の軍事学生については、1899年から張之洞により2度にわたり派遣された。その後、しばらく軍事学生の派遣が停滞したが、第3回目として、1904年1月端方（1861～1911）により武備学堂から多数の学生を選出して派遣された。これは最大の規模になり、測量19名、陸軍9名、陸軍經理2名、輜重2名、軍医2名、獣医2名、乗騎8名、蹄鉄2名、鞍工2名、軍楽2名の50名であった。しかし、当時、日本とロシアの外交関係はすでに緊迫状態にあり、翌月に日露戦争が始まった。戦争の勃発のため、陸軍部隊が前線に赴き、振武学校を卒業した留学生たちは聯隊に配属できなかつたり、聯隊実習が終了したとしても陸軍士官学校に入学できなかつたりする状況が続いた⁷⁰⁾。1905年7月、駐日公使の楊枢は、臨時外務大臣の桂太郎に「1904年6月以降、振武学校の卒業生は合計150名ほど実習できないが、一刻も早く聯隊に配属させ軍事教育を施してほしい」という文書を出し、早急な対応を求めている。しかし、現実には日露戦争の終結まで、陸軍士官学校の留学生受け入れが回復できなかった。これにより振武学校の第2期から第5期までの軍事留学生は卒業後の進路に大きな影響を受けたと考えられる。

IV 湖北留日学生の帰国後の動向について

1. 新式軍隊を管理する中央機関

1900年になると、清国政府に対して軍政改革を求める声が増しに強くなり、近代的軍隊すなわち新軍を再編成することが急務となった。中央の軍事指導体制に、大幅な調整を行い、軍政・訓練・装備に至るまで完全に西洋式に切り替えることが目指された。編成に関し

ては、「鎮」(師団に相当)、「協」(旅団に相当)、「標」(聯隊に相当)、「營」(大隊に相当)、「隊」(中隊に相当)、「排」(小隊に相当)、「棚」(分隊に相当)と定めた。それらを率いる者としてそれぞれ「統制」、「協統」、「標統」、「管帶」、「隊官」、「排長」、「棚長」を設置した⁷¹⁾。また、1903年、清朝政府は、各省の軍政・操法・機械がまだ統一されていなかったため、北京において「練兵処」を創設した。また、政府は慶親王の奕劻が練兵事務を管轄する「総理大臣」、袁世凱を「会弁大臣」、鉄良を「幫辦大臣」、徐世昌を「提調」にそれぞれ任命した。その下に、軍政・軍令・軍学を設け、全国の新軍に対して監督、訓練および規則立案の権限を付与していた。その後、全国軍隊の編成章程および番号をすべて統一的に取り扱うようにした⁷²⁾。

こうした情況のもとで、軍事系留日学生は貴重な人材に違いなかった。とくに初期段階の留学生数は少なかったため、早い時期に派遣された湖北留学生は、当然ながら新軍の首脳陣に目をかけられる。その結果、練兵処が成立後、湖北留日学生も数多く起用された。しかし、湖北から経費を醸出して育成した軍事人材はもともと地方に貢献することを期待されていたものであるにもかかわらず、中央が強制的に彼たちを練兵処に配属させた。したがって、張之洞は袁世凱に対して以下のように抗議した。

湖北学生約十名の急な転出については、天津に赴く際に北洋袁慰帥(袁世凱のこと)と面談するつもりである。目下、湖北武備学堂および各營の教練ではちょうど人手を必要としている。もし十名全部転出させると、こちらは人材が著しく不足する。……過去数年、われわれ湖北省は、留学生派遣に莫大な資金・時間をかけて精力を注ぎ込んできた。もし湖北省に有能な人材を一切任用できないとなれば、任用の仕方があまりにも不均衡だと言わざるを得ない。均等に半分北京に赴かせ、残った半分は湖北で働かせるほうが妥当ではないかと考える。……舒清阿、文華二人を荊州駐防常備軍の教練として派遣させる。両氏はもともと荊州駐防でその情況を熟知しているため、適している。藍天蔚、龔光明、敖正邦三名を湖北省内の教練として任用する。そのほか五名は直ちに北京へ派遣する予定である⁷³⁾。

湖北より派遣された第1期生の呉祿貞、盧静遠、呉祖蔭、文華、呉紹麟、第2期生の舒清阿、龔光明、良弼、哈漢章、易迺謙、應龍翔、沈尚濂はいずれも練兵処で要職に就いた。このように、中央が湖北陸軍士官学校の卒業生を破格の扱いで登用するケースがよく見られた。一方、学生の立場から考えると、地方の湖北より中央の練兵処のほうが権力層に近くて出世にも有利で、魅力的に映ったであろう。端方は「帰国した湖北官費留学生は故郷が恋しくなる感情がどうやら無かつたらしい」という不満をもらした⁷⁴⁾。

練兵処は「北洋六鎮」のほか、江蘇・四川に三鎮、湖北・広東・雲南・甘粛に二鎮、山東・安徽・江西・河南・湖南・浙江・福建・広西・貴州・山西・陝西・新疆・熱河・奉天・吉

林・黒竜江にそれぞれ一鎮を組織し、すなわち全国で「陸軍三十六鎮」の編成を計画した⁷⁵⁾。『練兵処陸軍營製餉章』によれば、基本として一鎮には、二つの歩兵協、一つの騎兵協、一つの工程營、一つの輜重營、一つの軍樂隊が配置される⁷⁶⁾。この計画は辛亥革命勃発まで実現できなかったが、成立した十四鎮十八混成協四標と禁衛軍は清末民初においては、高い戦闘力を有する軍隊だったといえる。とくに、北洋六鎮は袁世凱の政治と軍事両面における最も大きな支援組織となった。

1906年、全国の兵権を清朝政府のもとに一極に集中させる目的で、「練兵処」を「陸軍部」に改めた。それと同時に新しい陸軍士官学校の卒業生が採用され、軍政建設に重要な役割を担う。例えば、第1期砲兵科の万廷獻は、帰国当初、湖北で新軍の訓練監督を行い、後に陸軍練兵処に入り砲兵監督や軍政司長などを歴任した⁷⁷⁾。第4期歩兵科の蔣作賓は帰国後、科長として陸軍部に入り、日本の『歩兵操典』を翻訳して軍隊に普及させた。さらに、第4期歩兵科の何佩瑑、第6期歩兵科の孔庚なども陸軍部に入り、彼らは「陸軍三十六鎮按省分配限年編練章程」、「貴胄学堂畢業出身章程」、「陸軍警察隊試辦章程」などといった軍の内規整備に尽力した。

2. 湖北新軍

練兵処の設立以前に、湖北新軍を直接管理していたのは1902年に設立した「營務処」であり、その下に「参謀所」、「執法所」、「督操所」、「經理所」が設けられていた。1904年に、行われた軍事改革で、湖北に「督練公所」が設立されると、その下に「参謀処」、「兵備処」、「教練処」が設置された。これ以降、「營務処」の役割は「督練公所」に移管した。

湖北新軍には、1905年7月には二鎮が置かれていた。「張之洞遵照新章改編營制餉章并設督練三処摺」⁷⁸⁾によれば、第一鎮の統制は張彪で、正参謀官は藍天蔚であった。下に第一標、第二標、第三標、第四標が設置されている外、馬隊・砲隊・工程營・輜重營が置かれた。第二鎮の統制は黎元洪で、正参謀官は第一期歩兵科の呉茂節である。下に第五標、第六標を設置しているほか、同じく馬隊・砲隊・工程營・輜重營が置かれた。多くの指揮官は陸軍士官学校卒業生のほか、黎元洪をはじめとして、謝樹泉、劉温玉、米文友、李襄隣、卓占標などの留学経験者が占めた。

清朝政府は、1906年5月に湖北新軍を全国の陸軍体制に組み込み、もともとの湖北新軍第一鎮を「陸軍第八鎮」に再編成した。統制と正参謀官は引き続き張彪と藍天蔚が担当した。第八鎮司令部は省城の武昌を守るため、武昌の大都司港に駐屯した。再編当時、第八鎮司令部には、将校702名、兵士10,502名、そして漢陽88式小銃6,962丁、騎兵銃1,315丁、速射砲、山砲54門を有していた。それに対して第二鎮はもともと規模が鎮の基準に達していないため、縮小して「第二十一混成協」に再編成された。その後の規模は将校、兵士合計で4,900名である⁷⁹⁾。協統と正参謀官は引き続き黎元洪と呉茂節である。標、營の番号も全国的に統一するようにした。その後、湖北新軍の組織改革と人事異動が何度も行われたが1911年時点

の、軍の組織は表5のとおりである。

表5. 1911年の湖北新軍の組織について

鎮	協	標	營	隊	排	棚	
第8鎮 張彪	第15協 王得勝	第29標 張景良	每標3營	每營4隊	每隊3排	每排3棚	
		第30標 楊開甲					
		第16協 鄧承拔					第31標 曾廣大
							第32標 孫安國
		馬隊第8標 喻化龍	每標3營	每營4隊	每隊2排	每排3棚	
			砲隊第8標 龔光明	每標3營	每營3隊	每隊3排	每排3棚
			工程第8營	每營4隊	每隊3排	每排3棚	
			輜重第8營	每營4隊	每隊2排	每排3棚	
				軍樂隊			
第21混成協 黎元洪	第41標 易甲鵬	每標3營	每營4隊	每隊3排	每排3棚		
		第42標 張永漢	每標3營	每營4隊	每隊3排	每排3棚	
		馬第11營	每營4隊	每隊2排	每排2棚		
		砲第11營	每營3隊	每隊3排	每排3棚		
		工程第11隊	每隊2排	每排2棚			
			輜重第11隊	每隊2排	每排3棚		

出典：『清末新軍編練沿革』（中国社会科学院近代史研究所、中華書局、1978年）
『張之洞全集』第3冊（苑書義・孫華峰・李秉新編、河北人民出版社、1998年）を用いて筆者作成⁸⁰⁾

3. 清末南北新軍の軍事操練の実施

清末の軍事改革にあたって、日本は積極的に湖北派遣の軍事視察団を受け入れて日本陸軍の軍事演習を参観させた⁸¹⁾。これを通じて、清朝政府は明治維新の成果を認識したうえ、各種改革のモデルとして留学生の派遣や日本人軍事顧問の招請を推進した。結果として、その以降、日本人軍事顧問および留日学生数ともほかの国と比べて、急速に増加していき、外国人軍事顧問の主流派となっていく。

一方、新軍の成果を検証するため、日本陸軍の軍事演習にならい、全国規模の総合的な軍事パレード及び演習「新軍大会操」を合計3回実施した。すなわち1905年の「河間秋操」、1906年の「彰徳秋操」、1908年の「太湖秋操」である。また、北洋六鎮はもちろん、湖北・湖南・奉天・江蘇・浙江・福建・広東・河南・安徽・江西・雲南といった省も各自定期的に軍事操練・演習を行った。

「河間秋操」は、1905年10月、直隸で清末最初にできた北洋六鎮に対して行われた。閱兵大臣は袁世凱と鉄良である。第三鎮と第四鎮を主とし、第一鎮、第二鎮、第五鎮、第六鎮から一部を抽出し、合計45,002名が参加した⁸²⁾。ただし、「河間秋操」は北洋六鎮しか操練に参加していないため、翌年1906年に行われた「彰徳秋操」は南の新軍を加えて大規模な会操

となった。「彰徳会操」の閱兵大臣は同じく袁世凱と鉄良である。王士珍（1861～1930）は総参議を担当した。中央審判官長は哈漢章で、南軍の審判官長は馮国璋（1859～1919）で、北軍審判官長は哈漢章の陸軍士官学校同期生良弼である。中央審判官は、馮耿光、呉元澤、鄧承拔、唐在禮、寶瑛、蔣尊簋などが担当した。

「彰徳会操」の人員配置については、閱兵大臣であれ、南北方面軍の審判長であれ、満洲族と漢族からそれぞれ1名ずつ選ばれている。秋操では、南軍は攻撃担当で、北軍は防御担当であった。また、日本から陸軍少将松川敏允、陸軍砲兵大佐青木宣純、歩兵少佐柚原完蔵なども操練観賞に臨んだ。最後の評価およびコメントは、以下の通りである⁸³⁾。

私どもは実地に趣き、連日視察し、審判官に対して戦闘の理論によって公平に審査するように命じた。両軍が対峙の初五日、南軍は敵軍との距離がまだ離れているにもかかわらず、軽率に突撃してしまった結果、隊形が乱れ、兵士の体力も消耗し、やや慌てて行動している。それに対して、北軍は固く安定していたが、あまりにも慎重のため、時機を逃していると感じられる。また、両軍とも敵情の偵察、搜索が十分に行われていなかった。初六日、南軍の分隊の渡河は、時宜にかなっていたが、砲隊の射撃は敵を倒すまでにはいたらず、行軍が遅いため、右翼が包囲され、敗北する要因となりかねない。一方、互いに砲撃をする際、北軍の右側も隙だらけで危険であった。初七日、北軍は先に高地を占領し、側面から攻撃を準備した。隊を分けて南軍を誘き寄せると同時に、左翼は堅固な本隊を構えた。しかし、分隊が戦わずに撤退しているから、罨であることが明らかである。したがって、南軍はその計略を察知し、砲隊が「新庄山地」を砲撃すると見せかけ、側面から「二十里鋪」などを攻めていく、効果的な戦略をとった。残念なことに、各縦隊間の距離が離れすぎて、孤立した状態になった。先鋒各部隊も、互いに連絡がうまく取れず、団結力が足りずに、臨機応変に適切な処置を取っていない（以下略）

以上の報告によれば、北洋陸軍は、兵士の素養、各指揮官の連絡、部隊の装備の面においても湖北新軍より優位に立っていることが読み取れる⁸⁴⁾。北洋六鎮は、ほかの地方新軍と比べて遥かに強いが、袁世凱は操練について「湖北一鎮は、張之洞が長年苦心を重ねた運営により他人が達することのできないほどとなった。軍容強盛、士気健鋭、技術も熟練の域に達している。東南各省で、最も実力を有する部隊である。無論小さな欠点はあるものの、山を超えて河を渡りやってきて、こちらの地形に慣れていないゆえ……」⁸⁵⁾という肯定的なコメントをしている。他方、袁世凱が率いる北洋六鎮は軍事力が強ければ強いほど清朝の猜疑心を引き起こす。このため秋操の後、袁世凱は、野心のないことを示すため、北洋六鎮のうち、4鎮を陸軍部の直轄に委ねざるを得なかった。表6は清末新軍の第二次大規模秋操の編成関する主要情報をまとめたものである⁸⁶⁾。

表6. 陸軍第二次秋操の情報について

場所	閱兵大臣	総参議	南軍		北軍	
			河南 彰徳	袁世凱 鉄良	王士珍	總統官：張彪 總参謀官：劉邦驥
第八鎮統製：黎元洪 正参謀官：藍天蔚	第五混成鎮統製：張懷芝 正参謀官：張紹曾					
第二十九混成協統領：王汝賢 参謀官：聶慶恭	第一混成協統領：曹錕 参謀官：羅鴻魁					

出典：『袁世凱奏議』下冊（廖一中等編、天津古籍出版社、1987年）を利用し筆者作成⁸⁷⁾

2年後、1908年に湖北・江蘇といった南方各省を中心として安徽において「太湖秋操」が行われた。清末に挙行された河間会操（1905年）では、参加部隊は新軍の最精鋭部隊とされる北洋六鎮のみであったが、「彰徳会操」は、それにとどまらず湖北新軍が加わり、南北の軍事交流のほか、各地方新軍の間で協同作戦力を強化するねらいがあったものと思われる。

4. 湖北省の軍事教育機関

軍事系留日学生の帰国後、もう一つの進路として各地方の軍事教育機関に務める者も多かった。清末において湖北に存在した近代陸軍養成機関は、「湖北武備学堂」、「将弁学堂」、「武高等学堂」、「武普通中学」、「陸軍第三中学堂」、「湖北陸軍特別小学堂」、「湖北陸軍測繪学堂」、「湖北陸軍小学堂」などがあるが、これらの設立経緯や内実について以下時系列に沿って整理していく。

まず、第一節で触れた「湖北武備学堂」は、1896年創設で、場所はもともと鉄製局付近にあったが、1897年に武昌黄土坡に移転した。設立当初、蔡錫勇は学堂総辦、錢恂は提調を担当した。総教習はドイツ人のエーリッヒ・フォン・ファルケンハイン（1861～1922）、エルンスト・フォン・ストラウフ、リチャード・ゲンツであった。1902年に「武高等学堂」と改名した⁸⁸⁾。

「将弁学堂」は正式名称が「湖北防營将弁学堂」で、1901年に設立された。前身は緑營公所で、旧式軍隊の兵士に対する再教育を目的とし、修業年限は3年であった。湖北新軍の隊官（日本で中隊長にあたる）はこの学堂の卒業者が多い。1904年7月、「武高等学堂」と合併し、1905年に「武師範学堂」となった⁸⁹⁾。

「武普通中学堂」は1903年に創立された軍官予備学校である。教育内容は、成城学校をモデルとし、大きく普通学と軍事学に分かれ、普通学には漢文、外国語（ドイツ語と日本語）、歴史、地理、数学、博物、格致、図画があり、軍事学は歩兵操典、野外要務、工作教範、技撃、馬術、泅水、打靶、野外工作などの科目が設けられている。修学年限は4年で、卒業後は「武高等学堂」に進学できた。

以上の「武備学堂」、「将弁学堂」、「武高等学堂」、「武普通学堂」はいずれも張之洞の主導により設立されたものである。一方、中央軍事機関とされる「練兵処」の設立後に、軍事改革の主導権を握るのは清朝政府となり、軍事学校制度の確立に関する「陸軍学堂弁法」（1904

年)⁹⁰⁾、「陸軍小学堂章程」(1905年)⁹¹⁾が公布された。これにより全国の陸軍学堂は三種類に分けられた。すなわち「正課学堂」、「陸軍速成学堂」、「陸軍師範学堂」である。さらに、「正課学堂」は陸軍小学堂・陸軍中学堂・陸軍兵官学堂・陸軍大学堂といった4つの段階に分けられたが、辛亥革命までに、計画どおりに完全な実施はできなかった。

軍事教育関係の章程が確立後、各省は一律に陸軍小学堂(修業年限3年)を置いた。張之洞は、下級士官の養成を目的として、「武高等学堂」を基礎にして1906年「湖北陸軍小学堂」を創立した。設置された科目は日本の陸軍士官学校をモデルにし、普通学科には、修身、品行、国文、外文(英語とドイツ語と日本語)、歴史、地理、算学、代数、平面幾何、平面三角、格致、図画があり、軍事術科には、訓誡、操練、兵学、軍製、戦術、築城、地形、測絵、兵器、衛生、体操、撃刺があり、卒業後は、湖北陸軍中学校に進学できた⁹²⁾。

ただし、「武師範学堂」をもとに再編された「陸軍小学堂」は、学生数、修学内容、学堂組織の面において、練兵処が策定した『陸軍小学堂章程』と合致していない部分が見られる。例えば、当章程にはもともと1年100名の学生を募集し3年で300名を目安としているが、当該小学堂には、1年目は560名、2年目は830名が入学し、定員の枠を大幅に超えていた。そのため、1908年4月、当時の湖広総督陳夔龍(1857~1948)は学校名に「特別」をつけて「湖北陸軍特別小学堂」に改名した。他方、章程に従って同年8月新たに「陸軍小学堂」(1908年)を新設した。これ以降、「湖北陸軍特別小学堂」と「湖北陸軍小学堂」は辛亥革命まで並行して開校された。つまり、「陸軍特別小学堂」は湖北軍事教育機関の特徴も持つが、後の「陸軍小学堂」と混同されやすい。張彪は総辦、黎元洪は会辦、劉邦驥は監督となった。

小学堂の教育課程を修了すると、次の段階は、「陸軍中学堂」である。清朝政府は辛亥革命までに全国に4つの中学堂を設立した。すなわち直隸・清河においては「陸軍第一中学堂」(1909年)、陝西・西安においては「陸軍第二中学堂」(1910年)、湖北・武昌においては「陸軍第三中学堂」(1909年)、江蘇・南京においては「陸軍第四中学堂」(1909年)である。武昌にある「陸軍第三中学堂」は「武普通中学堂」を基にして改組したもので、陸軍将校養成の一環として位置づけられていた。湖北をはじめ、湖南・雲南・貴州・広西・陝西・甘粛にある陸軍小学堂から卒業した学生も進学できた。修業年限は2年で、学科科目は修身、国文、外国文、歴史、地理、算学、格致、弁学、図学、絵学、兵学、訓戒であり、術科科目は操練、技術が設けられていた⁹³⁾。設置課目から見ると、軍事の基礎知識・理論を重視していたことがわかる。このほか、陸軍部の指示により「湖北陸軍測絵学堂」が設立された。

第1期兵科の呉元澤(1874~1945)は、湖北・湖南・江蘇・安徽・江西といった華中地区の下級軍官を養成する機関「湖北防營将弁学堂」の堂長を担当した⁹⁴⁾。第1期砲兵科の劉邦驥は、陸軍士官学校の制度にならい、1905年に、「武高等学堂」を「武師範学堂」に改編して堂長となった。また、1909年に「湖北陸軍測絵学堂」の総辦を務めた。歩兵科の鉄忠(1873~1938)は「湖北陸軍特別小学堂」の監督を担当した⁹⁵⁾。騎兵科の呉祿貞(1880~1911)は、「湖北防營将辦学堂」の総教習。「湖北武普通中学堂」と「学務処」の会辦、「營

務処」の幫辦などを歴任した。

これらの軍事教育機関は、開設当初は、ドイツ人教習に頼っていたが、国内外の情勢変化にともなって、徐々に日本人教習に変更するようになった。そして、第1期と第2期の陸軍士官学校卒業生は、帰国後、ほとんど湖北または湖南の軍事教育機関の総弁、監督、総教習、教官に任命され、清末における各級陸軍学堂でさらに重要な役割を果たすようになっていった。

V 救国思想からナショナリズムの誕生

19世紀末から20世紀初頭、湖北は日本への留学が最も盛んな地域となり、軍事系学生が総数の大半を占めていた。ただ、前章に述べた戡翼翬、傅慈祥、呉祿貞などは、日本に亡命した孫文と梁啓超と交友をもち、彼らの提唱した革命思想・救国に影響を受けていた。その結果、1900年に唐才常らは帰国して自立軍の統率者となり、反西太后クーデターの「勤王蜂起」を計画した。しかし、その動きは張之洞に知られ、組織者は漢口で逮捕されて鎮圧されてしまった⁹⁶⁾。その失敗をきっかけに、留学生の目的が、立憲君主制の確立から、清朝を打倒することへと徐々に変化してきた。また、日本に留学生が絶え間なく来ていたため、留学生間の交流はますます活発になり、学習や生活上のことについて助け合い、また様々な情報の交換などが行われた。その中核となすのは共同団体「勵志会」、「清国留学生会館」、そして各省の「同郷会」などであった。

一方、1903年4月ロシアが「中露東三省交収条約」（1902年4月）の締結により、中国東北部から18ヶ月以内の段階的撤兵に応ぜず、履行条件として新たに7項目の要求を清朝側に求めてきた。これを契機をとし、上海をはじめ中国各地で抗議の集会が行われ、また同時に、日本の時事新聞社はロシア側の態度と事件状況について大いに報道した。在日清国留学生たちはこれに強く刺激を受け、4月29日自発的に500名前後が東京の神田駿河台「錦輝館」に集まり、「拒露義勇隊」を組織して中国東北部に赴くことを決定した。翌日には、本部の職員50人余りと、留学生30人余りが入隊を志願した。5月2日、再び会議を開き「義勇隊」を「学生軍」と改称し「学生軍規則12か条」が定められた。3日に、甲・乙・丙という三区隊が編成され、それぞれの区隊はさらに4つの分隊に分けられた⁹⁷⁾。具体的な編成状況は表7のとおりである。

表7. 学生軍名簿

学生軍総隊長：藍天蔚			1名	
甲区	甲区隊長：龔光明			1名
	甲一分隊	隊長	湯燾	1名
		隊員	夏清馥、陳茹昌、韓永康、韋仲良、袁華植、石鐸、沈剛、翁浩、何世準	9名
	甲二分隊	隊長	鄭憲成	1名
		隊員	胡鎮超、吳欽廉、劉景烈、黃潤貴、劉鍾蘇、李天錫、方聲濤、唐壽祺、盧藉剛	9名
	甲三分隊	隊長	楊明翼	1名
		隊員	林肇民、劉志芳、馮啓莊、許嘉樹、王孝纘、馮廷美、歐陽幹、張允斌、高兆奎	9名
	甲四分隊	隊長	陳秉忠	1名
		隊員	羅元熙、蘇子毅、吳壽康、何厚倜、李書城、伍嘉傑、周維楨、楊言倡	8名
	乙区	乙区隊長： 敖正邦		
乙一分隊		隊長	王渭忱	1名
		隊員	葉瀾、董鴻禱、甘啓元、方舜階、張淳、徐家瑞、陸規亮、張殿璽、張景光	9名
乙二分隊		隊長	尹援一	1名
		隊員	劉景沂、尚毅、劉成禺、李宣威、鄧官霖、張魁光、陳之驥、許壽裳、嚴智崇	9名
乙三分隊		隊長	鈕永建	1名
		隊員	徐秀鈞、劉景熊、黃軫（即黃興）、方聲洞、黃立猷、秦文鐸、華鴻、李士照	8名
乙四分隊		隊長	蒯壽樞	1名
		隊員	胡克猷、周宏業、王兆彬、顧樹屏、林先民、秦毓鑾、董猛、王寓基、吳雄	9名
丙区		丙区隊長： 吳祐貞		
	丙一分隊	隊長	劉蕃	1名
		隊員	江鵬鵬、陸龍翔、劉希明、陳美昌、盧啓泰、謝曉石、王明芳、黎勇錫、黃鐸	9名
	丙二分隊	隊長	林燾（白水）	1名
		隊員	高種、施爾常、李炳章、諸翔、王学文、鮑應、任責、黃実存、吳治恭	9名
	丙三分隊	隊長	貝均	1名
		隊員	徐秀鈞、劉景熊、黃軫〔黃興〕、方聲洞、黃立猷、秦文鐸、華鴻、李士照	8名
	丙四分隊	隊長	王璟芳	1名
		隊員	胡浚濟、張肇桐、宜桂、龔國元、潘國壽、廖世勳、戴贊	7名
	女性参加者		林宗素、王蓮、曹汝錦、陳懋鏞、華桂、胡彬、龔圓常、方君筭、鈕勒華、吳美、周佩珍、錢豐保	12名
本部職員		程家樞、費善機、丁嘉墀、張崧雲、俞大純、陳天華、楊毓麟、余德元、朱祖倫、林長民、蔡文森、王嘉榘、陳福頤、蹇念益、周慶冕、張修爵、濮祁、李盛銜、周兆熊、陳雲五、李雋、平士衡、朱孔文、彭樹滋、夏斌、楊汝梅、楊延垣、歐陽啓勳、王鎮南	29名	

出典：陳夏紅編『辛亥革命実績史料匯編・組織卷』（中国大百科全書、2011年）、林子勳『中国留学教育史（1847～1975）』（台湾・華岡出版、1976年）、馮自由『革命逸史』（中華書局、1981年）などを参照しつつ、筆者が修正加筆して作成

学生軍の隊長となった藍天蔚は「諸君が不肖の私を軍隊長に推挙したことで、軍隊のやり方で諸君と約束したい。軍隊と社会は違いが大きい。社会は平等が大切だが、軍隊は専制を重視している。そうしなければ、一人で百人、乃至十万、百万人を統率することはできない。以降、諸君とともに、銃弾の雨の中を行けば、個人の生死や利害を度外視することになる」⁹⁸⁾と演説した。5月5日には課程表を作成し、6日から隊員に対して本格的な訓練を開始した。上記の名簿を見ると、総隊長の藍天蔚をはじめとして、甲区隊長の龔光明、乙区隊長の敖正邦、丙区隊長の吳祐貞といった中心人物はすべて陸軍士官学校（第2期）を卒業した湖北留日学生であった。しかし、学生軍は、外務省と警視庁、そして駐日公使蔡鈞の干渉で解散させられた。関係者は急遽相談した結果、同月10日、鈕永建、湯桶を特派員として

北洋に派遣して袁世凱と交渉を試みるとともに、藍天蔚、秦毓璽、謝曉石、張肇桐が改定章程を起草する決定を下した。翌日11日、錦輝館で大会を開き「形式は変えても精神は変えず」として「軍国民教育会公約」11条を発表した⁹⁹⁾。14日には、鈕永建、湯桶は直隸へ出発し、16日に、軍国民教育会は「自治公約草案」を公布した。ここまで、わずか半月ほどの期間で「拒露義勇隊」は、「学生軍」、「軍国民教育会」と相次いで改名され、組織の性質もこれと同時に変化していった。

駐日公使の蔡鈞は、当時湖広総督の端方に「庚子の乱（義和団事件）では、勤王を以て蜂起した。今回は拒露を以て実に革命を起こそうとしている。東京では毎日操練しているので、大きな災いが降りかかる恐れがある」と報告した。これを受けた端方はリーダーとされる陸軍学生藍天蔚らに、直ちに帰国するよう促した¹⁰⁰⁾。一方、再組織された「軍国民教育会」の成立後、会員に漢民族の始祖とされる軒轅帝の像がある徽章が配られていた。また会の趣旨も、当初ロシアに対する抗議として、「尚武精神を養成し、愛国主義を実行する」というものであったが、次第に「民族主義を実行する」という反満的なナショナリズムを唱えるようになっていった¹⁰¹⁾。

おわりに

本稿では、まず湖広総督の張之洞が「湖北武備学堂」から20名の学生を選出して、最も早い時期に日本の成城学校へ派遣した背景・経緯を明らかにした。アヘン戦争後、西洋技術を導入して国防の近代化を模索するようになった清朝政府では、日清戦争の敗北とともに「洋務運動」を推し進めた李鴻章の影響力が低下していた。その一方で張之洞をはじめとする地方総督の勢力が台頭し、最も開明的な官僚として注目されていく。ただ、当時の清朝は、敗戦に伴って列強各国から不平等条約の調印を次々と強いられ、領土も租借・割譲されるようになった。厳しい外交状況の中、日本政府や陸軍参謀本部は張之洞に接近しつつ留学生派遣の働きかけを行った。その結果、湖北軍備の近代化として、日本留学を大いに奨励するようになった。同年、軍事・教育視察団の派遣後、日本へ武備学生の派遣を決定し、日本人の軍事顧問を招聘するに至った。すなわち日本側の目的は清国への勢力拡大の実現であり、張之洞の目的は早急に湖北の軍事改革を行うことであった。双方の利害が一致し合意に至ったのである。

多くの軍事系留学生は、成城学校（後の振武学校）で日本語予備課程を修了した後、陸軍士官学校に進学した。これら湖北省留日学生の陸軍士官学校における入学時期・卒業人数・専攻科目についての基本的データを再検討した（附録を参照）。また、留学生たちは帰国後の動向について、一部の卒業生は清末新軍を管理する練兵処、陸軍部、軍諮処（後に軍諮府）に重用されたほか、多くが湖北新軍・軍事教育機関で活躍するなど、彼らが湖北新軍の編成および訓練と軍事の近代化に果たした功績は大きいといえる。

清朝政府は「新政」に乗り出したが、北京練兵処のリーダーであった袁世凱や湖広総督を長年務めていた張之洞などは自分の勢力を拡大するため、人材養成に励んだ。当時、北京練兵処には張之洞の力を削減しようという意図もあり、湖北省の帰国軍事系留日学生を北京練兵処に破格の処遇で登用した。ただ、彼らは袁世凱に重要な地位を与えられた一方、秘かに革命活動を続けていた。その結果、湖北省の学生や湖北新軍の一部も革命思想を持ち、革命派を支持するようになり、辛亥革命の基礎を作っていたと考えられる。

最後に、軍事系留学生にとって、日本留学時代で得たさまざまな知識と経験、そして人的ネットワークは帰国後も大いに活かされていたことに違いない。また中国では清国から日本に留学し、そして陸軍士官学校を卒業した学生のことを「士官派」と呼ぶが、彼らは近代日中関係にどのような影響を与えたのか、この点については今後の課題としたい。

- * 本研究は中国政府（CSC）「国家建設高水平大学公派研究生項目」（〔2017〕3109）の助成を受けた成果の一部である。

注

- 1) 梁啓超『飲冰室合集』（全12冊）中華書局、1989年、その9冊の「專集五十七・中国印度之交通」（亦題為「千五百年前之中国留学生」）には、中国人がインドに仏教の經典を求めて多数の留学生を送っていたことを指摘している。3頁から20頁にわたり、「西行求法古徳表」を参照すれば、それらの留学生に関する情報を確認することができる。
- 2) 木宮泰彦著・胡錫年訳『日中文化交流史』（商務印書館、1980年）を参照のこと。遣隋使は600（推古天皇8）年から618（推古天皇26）年にかけて、4回派遣されている。また、遣唐使は630（舒明天皇2）年から894（寛平6）年に中止されるまでの派遣（任命を含む）は合計19回に上る。
- 3) 徐方謙は湖北江夏生まれ、段蘭芳は湖南茶陵生まれ、蕭星垣は湖南善化生まれ、譚興沛は湖南茶陵生まれである。この4人は成城学校における最初の中国人留学生とされている。ただ、段興沛は中途退学している。
- 4) 成城学校の前身は、1884年に東京・京橋区に創設された文武講習館である。1886年に牛込区に移転するとともに改名。1898年6月、川上操六により留学生部が設置された。
- 5) 実藤の代表的な著作である『中国人日本留学史』（くろしお出版、1960年）は、譚汝謙・林啓彦両氏によって『中国人留学日本史』というタイトルで中国語に訳され、中国大陸で三聯書店により簡体字版が出版されている。
- 6) 有力な業績を例として挙げてみると、例えば台湾の学者黄福慶『清末留日学生』（中央研究院近代史研究所、1975年）、林子勲『中国留学教育史（1847～1975）』（華岡出版、1976年）などによる代表的な成果がある。そして、中国大陸では、王奇生『中国留学生的歴史軌跡（1872～1949）』（湖北教育出版社、1991年）、王曉秋『近代中日文化交流史』（中華書局、1992年）、田正平主編『留学生与中国教育近代化』（広東教育出版社、1996年）があり、李喜所（南開大学）を中心とする「中国留学生研究センター」の成果として『中国留学通史（晚清卷・民国卷・新中国卷）』（広東教育出版社、2010年）がある。さらに章開沅・余子侠『中国人留学史』（社会科学文献出版社、2013年）などのような中外教育交流通史研究もある。

- 7) 受入教育機関別の研究に関して、近年、李成市・劉傑編『留学生の早稲田』（早稲田大学出版部、2015年）、見城梯治『留学生は近代日本で何を学んだのか—医薬・園芸・デザイン・師範』（日本経済評論社、2018年）、高田幸男編『戦前期アジア留学生と明治大学』（東方書店、2019年）がある。
- 8) 呂順長『清末中日教育文化交流之研究』（商務印書館、2012年）、梁中美『晚清民国時期貴州留日学生与貴州近代化』（西南交通大学出版社、2014年）、淳於森洽・潘麗霞『重慶留学史研究（1898～1966）』（中国社会科学出版社、2014年）はそれぞれ浙江・貴州・重慶の留学生に特化し、各地域の派遣状況および在日活動などについて検討している。また、樊国福『留日学生与直隸省教育近代化（1896～1928）』（河北大学博士論文、2012年）は直隸省を対象に、胡穎「清末の中国人日本留学生に関する研究—主に留学経費の視点から」（神奈川大学博士論文、2016年）は、経費という視点で湖北省・直隸省・東北三省を中心として分析している。
- 9) たとえば、小島淑男『留日学生の辛亥革命』青木書店、1989年。「日本大学中国人留学生の帰国後の活動（一・二・三）」『日本大学史紀要』第10号（2007年）、第11号（2009年）、第12号（2010年）などがある。
- 10) 日本陸軍士官学校に学んだ中国留学生の卒業率は約74%であるのに対して、留学生全体としての卒業率はわずか10%にすぎない。陳芳「近代中国留日陸軍士官生人数考究」『軍事歴史研究』2008年第2期、95頁。
- 11) 楊学新「留日士官生与保定陸軍軍官学校」『日本問題研究』1995年、張瑞安「留日士官生与民初軍事變革研究」『江南大学学报』第5期、2011年。
- 12) 李慶国「呉禄貞と日本（1）：呉禄貞に関する伝記史料をめぐって」『追手門学院大学国際教養学部紀要』第10号、2016年、藍薇薇『藍天蔚年譜長編』上海交通大学出版社、2016年。
- 13) 王鼎「清末における初期中国人日本留学生についての再考」『日本言語文化論叢』武漢大学出版社、2019年、210頁。
- 14) 『勸学篇』は9の内篇および15の外篇で構成される。外篇の中に、教育関連は「益智第一」、「遊学第二」、「設学第三」、「学制第四」、「広訳第五」、「閱報第六」がある。
- 15) 留美幼童とは、1872年から1875年にかけて、清朝政府によりアメリカ留学生として計4回派遣された120名の学童（平均年齢12歳）のことを指している。
- 16) 同上書、45頁、「張之洞：遊学」光緒二十四年三月（1898年4月）、原文は以下の通り：「出洋一年，勝于讀西書五年，此趙營平百聞不如一見之說也。入外国学堂一年，勝于中国学堂三年，此孟子置之庄岳之說也。游学之益，幼童不如通人，庶燎不如親貴…（中略）請論今事：日本小国耳，何興之暴也！伊藤、山縣、夏本、陸奥諸人，皆二十年前出洋之学生也，憤其国為西洋所脅，率其徒百余人，分詣德、法、英諸国，或学政治工商，或学水陸兵法，学成而歸，用為将相，政事一變，雄視東方。不特此也，俄之前主大彼得，憤彼国之不強，親到英吉利、荷蘭两国船厂，為工役十余年，尽得其水師輪機駕駛之法，并学其各厂制造；歸国之后，諸事丕變，今日遂為第一大国。（略）至游学之国，西洋不如東洋：一、路近省費，可多遣；一、去華近，易考察；一、東文近与中文，易通曉；一、西学甚繁，凡西学不切要者，東人已刪節而酌改之。中東情勢，風俗相近，易仿行，事半功倍，无過于此。若自欲求精求備，再赴西洋，有何不可？」
- 17) 阿部洋「中国の近代教育と明治日本」福村出版、1990年、55頁。
- 18) 高時良『中国近代教育史料匯編・洋務運動時期教育』上海教育出版社、1992年、511～512頁。
- 19) 『張之洞全集（3）』武漢出版社、2008年、412～413頁。
- 20) 神尾光臣は長野諏訪の人、明治・大正期の軍人。中国語を学び、日清戦後、清国公使館付武官補佐官や師団参謀長などを歴任、旅順攻囲や青島攻略に参戦した。
- 21) アジア歴史資料センター（JACAR）に所蔵されている戦前期外務省記録（5門軍事、1類・国防、1

王「清末における湖北省の軍事留学生」

- 項・一般軍事、軍備及軍費)の「清国兵制改革一件・清国ニ於テ帝国武官招聘ニ関スル件」(Ref. B07090025500、請求番号:5-1-1-0-14_001)。
- 22) 注:致日本參謀大佐神尾光臣 上海蔡道臺轉蘇、杭、寧波等處探投」(光緒23年12月初四日已刻發)張之洞全集卷二百二十一、7446頁。第九冊、原文は:「臺駕來鄂、適先期奏明出省勘堤工、僅派江漢關道及知府錢守接待、深以為漲。回省後、該兩員稟告閣下來意、極為欣悅。貴國與敝國同種、同文、同處亞洲、必宜交誼遠邁他國、方能聯為一氣。現在亟願面商一切切實詳細辦法、但中国制度、督撫不能出所轄省分、而此等事件非面談不可。可否請台駕重來鄂省、俾得面罄敝國真意、是東方大關繫事、不勝盼企之至。
- 23) 宇都宮太郎關係資料研究会編『日本陸軍とアジア政策:陸軍大將宇都宮太郎日記(第一卷)』岩波書店、2007年、7頁。
- 24) 『張之洞全集』卷129、公牘44、咨札44「札委姚錫光等前往日本遊歷詳考各種學校章程」(光緒24年正月18日)3559~3561頁。当時6人の肩書は、姚錫光は湖北武備学堂兼自強学堂總稽察、張彪は湖北護軍統領帶官、徐鈞浦は湖北槍砲場監造官、吳殿英は湖北武備学堂監操官、黎元洪は湖北護軍後營幫帶であった。なお、姚錫光一行の約二ヶ月の視察は、清国から派遣した日本視察団の嚆矢だとされている。それ以降、各省から日本へ視察団が頻繁に派遣されるようになった。清末における日本への教育視察団について、汪婉『清末中国対日教育視察の研究』(汲古書院、1998年)に詳しい。
- 25) 東京都立中央図書館実藤文庫に所蔵されている『東瀛學校挙概』(1899年)に姚錫光の報告がある。
- 26) 神谷正男編『宗方小太郎文書』「第一回目報告 学生を日本に派せんとす 明治31年9月19日」46頁。
- 27) 川崎真美「清末における日本へ留学生派遣一駐清公使矢野文雄の提案とそのゆくえ」『中国研究月報』第60巻第2号、2006年2月、大里浩秋・孫安石編『留学生派遣から見た近代日中関係史』(御茶の水書房、2009年)にも所収されている。
- 28) 『伊藤博文伝(下)』春畝公追頌会、1940年10月16日、401~402頁。
- 29) 伊藤博文關係文書研究会編『伊藤博文關係文書(8)』塙書房、1980年、392~393頁。
- 30) 東亜文化研究所編『東亜同文会史』霞山会、1988年、181~182頁。
- 31) 大山梓編『山県有朋意見書』原書房、1966年、251~252頁。
- 32) 外務省外交史料館「清国留学生關係雜纂」に所収されている公信第12号「湖北江蘇派遣学生出發期日及江蘇学生姓名人員並ニ學資金送付之件」。
- 33) 劉邦驥(1868~1930)湖北漢川の人、字は襄奎、北洋政府の陸軍中將。兩湖書院出身、官費留学生として来日、陸軍士官学校卒業。その後、湖北武師範学堂・湖北陸軍小学校などを創設。湖南軍事參議官・北京高級警官学校長などを歴任した。なお、關係人物履歷の参考資料として、主に章開沅主編『辛亥革命辭典』(武漢出版社、1991年)および、辛亥革命武昌起義記念館編『辛亥革命人物像伝』(武漢大学、1993年)などがある。
- 34) 吳元澤(1874~1945)湖北保康の人、字は惠軒、北洋政府の陸軍中將。兩湖書院から選抜され、官費留学生として来日、成城学校を経て、陸軍士官学校第一期(歩兵科)に入る。帰国後、広西督練公所總弁・広西陸軍講武堂・湖北督練公所教練幫弁・湖北将弁学堂長・第二十一混成協第四十一標統・湖北軍政府軍學司長・湖北陸軍小学校長などを歴任した。
- 35) 盧靜遠(1874~1945)、湖北竹溪の人、字は惺源、北洋政府の陸軍中將。兩湖書院から選抜され、官費留学生として来日。成城学校を経て、陸軍士官学校第一期(歩兵科)に入った。卒業後、湖北将弁学堂教習および第一庁長兼第四庁長などを歴任した。
- 36) 劉廣雲(1870~?)湖北沔陽の人、字は伯剛、劉道仁とも呼ぶ。兩湖書院から選抜され、官費生として来日。成城学校を経て、陸軍士官学校第一期(歩兵科)に入った。卒業後、湖北武普通中学堂監學・京師練兵処監督・南京參議院議員・内政部衛生司長などを歴任した。

- 37) 鉄良 (1864～?)、鉄忠とも呼ぶ。湖北荊州の旗人。両湖書院から卒業、陸軍士官学校第一期 (歩兵科)、湖北新軍第一鎮第二標統帯官・湖北督練公所兵備処総弁・湖北陸軍小学堂監督・湖北監督公所軍事参議官・鑲黃旗漢軍副都統・鑲白旗漢軍都統などを歴任した。
- 38) 傅慈祥 (1871～1900) 湖北潜江の人、両湖書院・湖北武備学堂に学び、官費留学生として来日、成城学校に入った。在日中、呉禄貞・蔡鍔・錢承誌などと「勵志会」を組織した。義和団事件のとき、鎌倉で自立軍を組織し、勤王蜂起をしたが、張之洞に逮捕されて唐才常・林圭とともに処刑された。
- 39) 外務省外交史料館『在本邦清国留学生関係雑纂・陸軍学生之部 第1巻』(請求番号:B-3-10-5-3_1、アジア歴史資料センターにある「在英公使へ通報・分割1」(Ref. B12081617100)の一連史料に基づいて作成したものである。
- 40) 両湖書院は、1890年張之洞により創設された最も大きな書院である。場所は武昌城内都司湖 (現・武漢大学人民医院、武漢音楽学院一帯、跡地に記念碑が建てられている) にある。梁鼎芬 (1859～1919) は書院の事務を総轄する。後に「文高等学堂」、そして「両湖総師範学堂」へと改組された。馮天瑜・張篤勤『辛亥首義史』湖北人民出版社、90～91頁を参照。
- 41) 南洋公学とは、盛宣懷 (1844～1916) によって1896年上海で創設された新式学堂である。現在の上海交通大学および西安交通大学の前身だとされている。
- 42) 例えば、龔光明は兵器学ではなく、砲兵学を学んだ。藍天蔚は工兵学を学んだ。
- 43) 哈漢章 (1880～1953) 湖北漢陽の人、字は雲裳。回族、陸軍中將。両湖書院・湖北陸軍学堂に学んで、官費留学生として来日した。陸軍士官学校第二期 (歩兵科) 卒業、帰国後、湖北文普通学堂教習兼監学・湖北省将弁学堂教官・軍督処副使・袁世凱總統顧問・黎元洪總統府軍事幕僚などを歴任した。
- 44) 沈尚濂、湖北恩施の人、字筱溪、陸軍士官学校第2期 (砲兵科) 卒業、帰国後、江陰要塞砲台司令となる。
- 45) 舒清阿 (1877～?) 湖北荊州の人、漢軍正白旗、字は質甫。湖北武備学堂から選抜されて官費生として来日。成城学校を経て、陸軍士官学校第2期 (歩兵科) に学んだ。帰国後、湖北参謀官務処軍謀学諮議官・湖南新軍第一標統・両江督練公所総参議・江南陸軍講武堂総弁・總統府軍事顧問などを歴任した。
- 46) 寶瑛 (1874～?)、湖北荊州の旗人、陸軍士官学校第2期 (歩兵科) 卒業。帰国後、湖北陸軍小学校総弁となる。
- 47) 程家裡 (1874～1914) 安徽休寧の人、字は韻蓀・潤生。武昌両湖書院出身、官費留学生として来日、東京帝国大学卒業。在日中、拒露運動 (1903) に参加し、宋教仁・田桐とともに『二十世紀之支那』(1905) という雑誌を創刊。帰国後、京師大学堂農科教習となる。また、白逾桓などと『国風日報』(1911) を創刊、1914年に「鉄血団」を組織して袁世凱を暗殺しようとしたが、情報が漏れたため、逮捕されて処刑された。
- 48) 王遇甲 (1882～?) 湖南鄂城の人、字司丞、北洋政府陸軍中將。湖北随营学堂から選拔され、官費留学生として来日。陸軍士官学校第2期 (砲兵科) 卒業。帰国後、陸軍第四鎮第八協統・馮国璋高級参謀總統府侍従教官・満州国吉林省警備司令部少将などを歴任し、鄂城鉄鋼株式会社を創設した。
- 49) 敖正邦 (1880～1940) 湖北恩施の人、号は子瞻。湖北武昌講武堂、日本陸軍士官学校第2期 (歩兵科) 卒業、帰国後第九鎮第十八協統・湖北軍政府軍務処長・黄埔軍校第4期教授部副主任・南京中央軍校編訳処長・陸軍大学少将高級教官などを歴任した。
- 50) 應龍翔 (1877～1948) 湖北黃陂の人、字は雲從、北洋政府陸軍中將。陸軍士官学校第2期歩兵科卒業。その後、湖北将弁学堂教官、北京練兵処軍政司器械科監督、陸軍部科長・河南陸軍第29混成協統領・湖北陸軍第三師第五旅長・湖北応城石膏株式会社取締役となる。

王「清末における湖北省の軍事留学生」

- 51) 龔光明、陸軍士官学校第2期（砲兵科）卒業、在日中、拒露運動に参加し、甲区第四分隊長となる。帰国後、陸軍第八鎮砲隊第八標統、北洋政府から陸軍中將を授けられる。
- 52) 外務省外交史料館『在本邦清国留学生関係雑纂・陸軍学生之部 第1巻』（請求番号：B-3-10-5-3_1、アジア歴史資料センターにある「在英公使へ通報・分割2」（Ref. B12081617200）に基づいて作成したものである。
- 53) 章宗祥「任闕齋主人自述」『上海文史資料存稿匯編・政治軍事』上海古籍出版社、2001年、32頁。原文は、「在日本時、同人聚談國政、革命之思想、發達甚速。毎星期日、與成城同人之維新派會合（自湖北來者、有思想極舊之人、當時目之為頑固派、不相往還）組織勵志會、假日本茶室為會所、上野三宜亭、牛込清風亭時往聚集、清茶煎餅、議論自由。勵志會之組織、會員全體平等、不設會長；會中乾事、由會員輪值。會時演說、或講学、或論政、隨各人意、絕無形式上之規制。而對於品行一端、極重視。某君在校、因事向日本教習賠罪、行和式伏禮、同人以對外人叩頭、引為大恥、提議除名。實則日人席地而坐、相見叩頭、本為常禮。與中國之下跪乞憐、情形大不同也。會員演說之最激烈者、以湖北出身者為最多、如傅良弼、吳綏卿、藍秀豪等皆其卓卓者」である。
- 54) 東京の留学生たちは、「自立軍」の規則を定め、編成・蜂起路線などについて計画した。すべて安徽・大通にある「前陣」、安徽・安慶の「後陣」、湖南・常德の「左陣」、湖北・漢口の「中陣」、「総会親軍」、「先鋒軍」の7軍から組織されている。
- 55) 孫瑛鞠「梁啓超の近代国民思想の形成一任侠から新民へ」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第42号、2016年、106頁。
- 56) 東京都立図書館・實藤文庫に所蔵されている沈翊清『東遊日記』1900（光緒26）年、福州刻本、7頁。
- 57) 「外務省記録・在本邦清国留学生関係雑纂・陸軍学生部1」0112号、0113号。
- 58) 「清国学生一年半教育学科配当授業回数表」によれば、各科目の授業時間数は以下の通りである。日本語は384回、日本文は347回、地理及地文は69回、歴史は66回、算術は177回、幾何初歩は40回、幾何は112回、代数は140回、三角法は77回、博物初歩及生理衛生は51回、化学は58回、物理は79回、図画は111回、体操は209回である。
- 59) 前掲書（55）、15頁。
- 60) 成城中学校・高等学校に保管されている「清国陸軍留学生卒業成績表」を参照。総合成績については、学生入学してから数回行われる試験評点に、卒業最終試験の評点を合わせて得た平均点数である。優等は80点より100点、中等は40点より79点、下等は0点より39点と定められている。
- 61) 黄福慶『清末留日学生』中央研究院近代史研究所、1975年、36頁。
- 62) 黄福慶、前掲書37頁。
- 63) 『東方雜誌』（第7期）、教育、1905年、162～163頁。
- 64) 『振武学校一覽』（1907年）：一、規定に従って學術に専念すべし。世論を惑わせることせず、政治に関わる論談はしてはいけない。二、年長者の言うことに背いてはならない。紀律を守って尊敬・服従の意を表すべし。三、苦勞と困難を持ちこたえる忍耐力を育成し、緊急事態を乗り切れるように努力すること。四、威厳莊重を尊ぶべし。日常生活の立ち居振る舞いを正し、身なりを上品に整えるべし。沽券を重んじ、贅沢や怠惰は一切これを禁じる。五、本校すべての授業は軍事学の扉と考へ、きちんと勉強すべし。授業の適切さを勝手に議論してはいけない。六、本校の学生はすべて同士で、仲睦まじくお互いに忠告し、仁徳を育成すべし。実直誠実を旨とすべし。七、本校の教官・職員に会った際には、規則にのっとりお辞儀をすること。（筆者が訳したもの）
- 65) 陳学恂・田正平編『中国近代教育資料匯編・留学教育』上海教育出版社、1991年、23～26頁。
- 66) 大浜徹也・小沢郁郎編『帝国陸海軍事典』同成社、1995年、101頁。

- 67) 沈雲龍・郭榮生『日本陸軍士官学校中華民国留学生名簿』文海出版社、1974年、5～7頁。徐白「日本士官風雲録」劉真主編『留学教育—中国留学教育史料』国立編訳館、1980年、370～394頁を参考にし、外交省記録にある「在本邦清国留学生関係雑纂・陸軍学生部」を利用し整理した。
- 68) 黄福慶『清末留日学生』39頁。郭榮生『日本陸軍士官学校中華民国留学生名簿』文海出版社、1975年、153～159頁、東亜同文会調査編纂部「日本陸軍士官学校卒業中国留学生表」、『中国年鑑』第4回を利用し、筆者が整理したものである。また、第9期の陸軍士官学校に在籍していた留学生たちは辛亥革命勃発のため、1911年11月に全員が退学となった。
- 69) たとえば、黄福慶『清末留日学生』（中央研究院近代史研究所、1975年）の「表2. 志願士官之中国学生人数」（39頁）に入聯人数・入士官学校人数・士官学校卒業人数の統計データがあるが、「日本留学中華民国人名調」（興亜院、1940年）、「日本陸軍士官学校卒業中国留学生表」（『中国年鑑』、東亜同文会調査編纂部、1920年）、「日本陸軍士官学校中華民国留学生名簿」（郭榮生校補、文海出版社、1975年）にある統計データと一致していないところも多い。
- 70) 外務省外交史料館『在本邦清国留学生関係雑纂・陸軍学生之部 第2巻』（請求番号：B-3-10-5-3_1、アジア歴史資料センターにある「第2巻・分割1」（Ref. B12081617800）に基づいて作成したものである。
- 71) 『清国軍制の大綱』清国駐屯軍司令部編纂、1908年、44～45頁。
- 72) 袁世凱「北洋常備軍擬一律改為陸軍各鎮片」（1905年2月25日）。『袁世凱奏議』（下冊、卷32）天津古籍出版社、1987年、1320～1321頁。
- 73) 「致京練兵処 天津袁宮保」光緒30年2月26日、『張之洞全集』第11冊、9132～9133頁。
- 74) 前掲書、「武昌端兼院來電」、9123頁。
- 75) 『最近三十年中国軍事史』（上冊）、文星出版、1962年、53～57頁。原文は、「張之洞電謂：急。前奉調湖北學生前後十名，過津時當經與北洋袁慰帥面商，湖北武備學堂及各營教操帶隊在在需人，儻以十名全行調往，必致無人可用。屢奉諭旨，責成湖北練兵。歷年鄂省派學生赴東洋學習，費無數財力、無數心力，如全不歸鄂用，未免偏枯。擬遣一半赴京，留一半在鄂，以昭平允。經慰帥轉商尊處，荷蒙允許。感甚。茲荊州將軍因奏明添備常備軍二千名，委員來省，囑派出洋肄業之學生前往教操，而鄂省新募各營亦亟需教練。茲擬留舒清阿、文華二人派赴荊州駐防常備軍帶隊教操，該兩生既係荊州駐防，性情習熟，尤為相宜。留藍天蔚、龔光明、敖正邦三名在鄂省帶隊教操。其餘五名，即遣赴京。特此電達，務祈垂鑒。荊鄂練兵，關係緊要，準如所請，實深感禱，即候示覆。宥」である。
- 76) 「練兵処奏定陸軍營餉章」、『東方雜誌』1905年第2期、55頁。
- 77) 馮天瑜『湖北省人物志稿』光明日報出版、1982年、457頁。万氏は、『鎮・協・標・營の各種兵種の編成条例』、『歩・馬・工・輜等兵種の操典』の編纂に携わり、その功績は郷土の歴史に記載されている。
- 78) 「遵照新章改編營制餉章并設督練三處折」（光緒31年11月11日、即ち新曆12月7日）、苑書義・孫華峰・李秉新編『張之洞全集』第3冊（河北人民出版社、1998年）、卷65・奏議65、第1682頁。
- 79) 『武昌区志』下卷、武漢市地方志編纂委員会、武漢出版社、2008年、767～768頁。
- 80) 『清末新軍編練沿革』、『中華民国史資料叢稿・第2輯』中国社会科学院近代史研究所、中華書局、1978年、211頁。また前掲書（72）、1676～1683頁を参照して作成。
- 81) 李廷江『日本軍事顧問と張之洞1898～1907』アジア研究所紀要（29）、2002年を参照。
- 82) 「練兵大臣袁世凱等為陳校閱陸軍會操情形事奏折」来新夏『中国近代史料叢刊・北洋軍閥』（一）上海人民出版社、1988年、575～576頁。
- 83) 同前掲書。原文は、「臣等馳驅戰地，連日縱觀，並飭各審判官依據戰理，秉公詳斷，如初五日南軍馬隊，距敵尚遠，遽爾衝鋒，既致紊亂隊形，復易疲敝馬力，未免稍涉張皇。北軍較為穩固，然過於持重，亦覺有誤時機，至兩軍偵探、搜索，未能十分得力，則皆同坐此弊。初六日南軍分隊渡河甚合機宜，但砲隊射擊，

王「清末における湖北省の軍事留学生」

未足以致敵之命，又進軍較緩，致右翼受敵圍困，誠不免於失利。然於炮火互施之際，北軍右側暴露過甚，亦屬近於危險。初七日北軍先據高地，預備側擊。另以枝隊誘敵，而於左翼厚集重兵以待之，佈置甚是。然枝隊未戰先退，是使敵軍易於覺察，未必即墮其術中。南軍先用砲隊斜擊新莊山地，然後攻撲二十里鋪等處，可謂善於搗虛。但各縱隊之距離過遠，形勢轉孤。前鋒各隊，亦未能互相聯絡，以致團結無力，運動困難，是均有不甚完密之處」である。

- 84) 「復陳校閱陸軍會操詳細情形摺」(1906年11月)、『袁世凱奏議』下冊(卷41)、1388頁。
- 85) 前掲注(72)、原文は、「至就四省軍隊分析衡論、湖北一鎮、經督臣張之洞苦心孤詣、經營多年、軍容盛強、士氣健銳、步伐技藝、均已熟練精嫻、在東南各省中、實堪首屈一指。其猶不無疲累者、則以越疆遠出、地形生疏、故於作戰應敵、部署未能悉當」である。
- 86) 尚小明「留日学生与清末軍事改革」『戊戌維新与清末新政』北京大学出版社、1998年、252頁。
- 87) 廖一中・羅真容『袁世凱奏議』下、天津社科院歷史研究所、天津古籍出版社、1987年、1396頁。
- 88) 「設立武備學堂摺」『張之洞全集』第3冊、武漢出版社、2008年、412~413頁。
- 89) 蘇雲峯、前掲書、251頁。
- 90) 「練兵處新定陸軍學堂弁法二十條」『東方雜誌』第1卷第12期、1904年。
- 91) 「考核各省旗開弁陸軍小學堂情形摺」『東方雜誌』第4卷第9期、1907年。
- 92) 「陸軍小學堂將屆畢業援案請獎摺」蘇雲峯『中国現代化的区域研究(1860~1916)』258頁、1987年。
- 93) 「陸軍部奏訂陸軍中學堂章程摺」『南洋兵事雜誌』1908年第23期、1頁。
- 94) 蘇雲峯『中国現代化的区域研究：湖北省(1860~1916)』、254~255頁。
- 95) 鉄良は、後に名前を忠に変えた。当時の兵部尚書の鉄良(1863~1939)と区別するためである。前掲書、259頁。
- 96) 林邁之等『自立会史料集』岳麓書社、1893年、16頁。
- 97) 『湖北学生界』第4期の「留学記録・学生軍縁起」、120~127頁。
- 98) 楊天石・王学庄編『拒俄運動1901~1905』中国社会科学出版社、1979年、93~94頁。
- 99) 前掲書、100頁。
- 100) 『浙江潮』第5期「党禍又作」、1903年、9頁。
- 101) 中村哲夫「拒俄運動隊・軍国民教育会」『東洋學報』(第54期、1971年)に拒露運動の経緯について詳しい記述がある。

付録：

陸軍士官学校（第1期～第8期）の湖北留学生および活躍者たち

	科目	湖北派遣・湖北出身者	同期の主な活躍者
第1期	歩兵科	呉茂節（4）易甲鵬（5）呉元澤（6）劉慶雲（7） 鐵良（8）高曾介（18）呉紹璘（19）呉祖蔭（20）	陳其采（1）呉錫永（2）蕭星垣（11） 舒厚德（12）蔣雁行（15）段蘭芳（22）
	騎兵科	呉禄貞（2）	王廷楨（1）
	砲兵科	盧靜遠（1）劉邦驥（7） 文華（8）萬廷獻（9）	唐在禮（2）陸錦（3） 張紹曾（4）許葆英（5）
	工兵科	鄧承拔（3）顧臧（4）	章適駿（1）徐方謙（5）
第2期	歩兵科	舒清阿（1）哈漢章（2）良弼（3）応龍翔（4） 蕭先勝（6）寶瑛（7）呉祐貞（8）敖正邦（9） 蔣政源（10）余明銓（11）楊正坤（12） 張長勝（14）段金龍（16）	馮耿光（5）
	騎兵科	蕭開桂（1）蔣肇鑑（2）	
	砲兵科	龔光明（1）王遇甲（2）沈尚濂（3）	許崇儀（4）
	工兵科	藍天蔚（2）易迺謙（3）	王麒（1）
第3期	歩兵科	游捷（23）	蔣方震（1）周道剛（2）許崇智（3） 曲同豐（6）胡景伊（7）岳開先（9） 盧金山（13）賈德耀（14）劉詢（15） 潘矩楹（17）宮邦鐸（26）張懷斌（30）
	騎兵科	なし	高爾登（1）蔣尊簋（2） 蔡鏗（3）陳文運（4）
	砲兵科	なし	呉光新（8）張樹元（9）王汝勤（10） 傅良佐（11）蔣廷梓（20）
	工兵科	なし	張孝準（1）姚鴻法（4）
	輜重兵	なし	汪慶辰（3）楊祖德（2）
第4期	歩兵科	蔣作賓（3）石星川（6）呉祉貞（9）劉一清（10） 程守箴（11）覃師範（12）金永炎（14）呉經明（16） 寶洪勝（18）裕冕（19）棋昌（20）沈尚樸（21） 張学齡（23）高佐国（24）王家駒（26） 趙康時（28）何佩琿（30）張明達（33）	張承禮（1）李宣倜（8） 張斯慶（25）田應詔（32）
	騎兵科	慶芳（5）黎本唐（7）	汪釐（6）
	砲兵科	莊翼（3）周斌（4）朱兆熊（5）噶勒柄阿（6） 姜明經（7）沈郁文（10）熊祥生（11）劉堯元（14） 邵保（15）馬祖全（17）童序鵬（18）	李祖道（1）噶勒柄阿（6）
	工兵科	劉繩武（6）雙祥（7）那瑪善（8）	翁之麟（1）王若儼（9）
	輜重兵	蕭鴻陞（2）	王右海（1）
第5期	歩兵科	王風清（3）黃愷元（4）何成濬（7）胡百鍊（8） 黃本璞（9）陳乾（10）李浚（13）夏占奎（15） 雷寿采（16）謝武煒（19）蔡紹忠（21）王文卿（23）	沈同午（2）
	騎兵科	范熙績（3）	汪鎬基（2）
	砲兵科	簡業敬（2）楊齊鳳（4）全在茲（5） 葉乘甲（8）李實茂（9）春群（10）	譚学夔（1）沈汪度（11）
	工兵科	張炳標（5）	姜登選（4）危道豐（10）
	輜重兵	徐定清（1）	高兆奎（3）

王「清末における湖北省の軍事留学生」

第6期	歩兵科	尹扶一 (12) 長青 (22) 張華輔 (25) 志元 (35) 彭道成 (37) 盧啓泰 (39) 劉宗紀 (40) 王兆翔 (65) 万德尊 (83) 孔庚 (84) 蔣蔭曾 (89) 高声震 (92) 葉佩勳 (93) 李隆中 (94) 吳劍学 (96) 左全忠 (102) 程子楷 (105) 紀堪頤 (109) 陳晋 (110)	楊邦蕃 (4) 孫傳芳 (19) 李根源 (28) 尹昌儀 (33) 劉存厚 (36) 羅佩金 (47) 周駿 (54) 歐陽武 (59) 莫擎宇 (73) 閻錫山 (81) 葉荃 (87) 張開儒 (106)
	騎兵科	陳模 (12) 熊一弼 (18)	盧香亭 (15) 張鳳翹 (16)、顧品珍 (21)
	砲兵科	張国威 (1) 朱綬先 (2) 楊尚志 (19) 趙恒揚 (27) 張耀 (37)	張国威 (1) 韓麟春 (6) 周蔭人 (17) 唐繼堯 (20) 李烈鈞 (31) 程潛 (32)
	工兵科	徐家瑑 (8) 成炳榮 (12)	黃承恩 (1) 韓鳳樓 (2)
	輜重兵	江雋 (3) 吳炳元 (8)	蕭祖康 (1)
第7期	歩兵科	なし	徐樹錚 (20) 唐之道 (23)
	騎兵科	なし	宋邦翰 (9)
	砲兵科	なし	宋子揚 (10)
	工兵科	接宗 (5) 湖北荊州駐防旗人	程恆式 (4)
第8期	歩兵科	戢翼翹 (1)	張輝瓚 (2) 于珍 (5)
	騎兵科	なし	邢士廉 (6)
	砲兵科	張厚頤 (6)	張修敬 (1) 楊玉亭 (7)
	工兵科	なし	夏尊武 (3)

出典：「日本陸軍士官学校卒業中国留学生表」『中国年鑑』（東亜同文会調査編集部、1920年）、『日本陸軍士官学校中華民国留学生名簿』（郭榮生校補、文海出版社、1975年）、外務省記録『在本邦清国留学生関係雑纂・陸軍学生之部』第1巻至第5巻（請求番号：B-3-10-5-3_1）外務省外交史料館所蔵、『清国留学生会館報告』第1次至第5次（清国留学生会館編集、1902年至1905年）などの史料を利用し、修正加筆して作成した。また、活躍者について『晶報』（1926年1月6日）に載せた「留日士官之風雲際会」による。括弧内の数字は、同科目内の序列番号である。また、第6期・歩兵科の尹昌儀は後に「尹昌衡」に改名、第8期・砲兵科の楊玉亭は「楊宇霆」に改名。